
パパとの関係

華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパとの関係

【Nコード】

N5259M

【作者名】

華陽

【あらすじ】

近江家の長男として、何不自由なく暮らしてきた倅。

そんな倅に青天の霹靂。突然養子に出されてしまう。

新しい父親の高鳥京介は大財閥のくせして、まったく手伝いを雇わない。

そんなこんなで、家事と勉強を両立しなくちゃいけなくなってしまった。

時々突然激しいスキンシップをしてくる京介にいつも悩まされる倅の明るく、そしてちょっと切ない物語。

かわいい鴻と鬼畜な秀のお話も同時進行です。
学園的な要素も多分に織り込んでいく予定です。

人物紹介（前書き）

はじめましての方も、前作から読みいただいている方も、こんにちは。

華陽です。

今回もどうぞよろしくお願いします。

人物紹介

近江倖^{おつみゆき}：大財閥近江家の長男。小柄で目が大きい典型的なかわいいタイプ。

ある日、突然父親から、ライバル財閥高鳥家へ養子に出されてしまう。

新しく父親となった高鳥京介は毎日毎日過剰なスキップをしてくる。

軽く貞操の危機。元気いっぱい明るい少年だけど、本当は……。

私立東稜学園一年生。

高鳥京介^{たかとりきょうすけ}：大財閥高取家の若き当主。

質素儉約を常として、家には手伝いを一切置かない。

そのため、家事全般に精通している。

現在は、倖に家事を教えている。

東稜学園の理事長も兼任している。

人物紹介（後書き）

主要人物以外は、いつもどおり少しずつ書いていきますので、よろしく願います。

a c t・i 青天の霹靂（前書き）

今回は、プロローグみたいなものです。

まあ、軽く流す感じでお読みいただければ幸いです。

act・1 青天の霹靂

穏やかな休日の午後。

近江邸では、ひとつの叫び声が走った。

「父さん！俺が養子入りってどういうことなの！」

「うるさいぞ倅。もうこれは決定事項なんだ。明日はちょうど日曜だから移動の手筈は整えておいた。明日には高鳥邸に向かうんだぞ。」

「そんな、説明だけでもしてよ。」

「そうですよ、父さん。これは家の問題にもなるんですよ。」

こういったのは、弟の近江景おうみけいだ。

俺と違って、成績優秀。長身で今時のイケメンってやつ。

くそ。俺だつてもうちよつと身長が高ければ……。

「それに、その養子先が高鳥家だなんて。」

「高鳥は名門の一族。問題はないだろう。」

「それでも、最近ライバル同士ではないですか。」

「先ほどもいったが、これは決定事項だ。私はこれからドイツに取引先の相手との交渉に行かなければならない。この話はこれで終わりだ。」

そういうと父さんはすばやく部屋を出て行ってしまった。

「なんなんだよ。いきなり。」

思わず床にヘタツと座り込んでしまう。

「兄さん……。大丈夫だよ。きっと父さんも何か考えがあつて……。」

「その考えが怖いんだよ。」

はぐつとため息をつく。

「それにしても、何で兄さんなんだろうね。普通長男はそういうのと無関係のはずなのに。」

そつ、確かにそうなんだよ。

普通、跡継ぎの長男はこういうのと無関係だろ。

もしかして、できの悪い長男より、優秀な景の方がいいってことなのか？

いやいやだめだ。このことをこれ以上考えてるとどんどん気持ちが悪くなる。

気を取り直して、

「なあ景。その高鳥家の今の当主ってどんなやつなんだ？」

「ああ、若くして高鳥家の執政を一手に纏め上げる俊才らしいよ。ほら、この前父さんに連れられて行ったパーティで最初に話した人。」

「ああ、あの人か。ん？あれ、あの人20歳位じゃなかったか？」

「うん、24歳だったと思うけど。」

「え、じゃあ明らかに義理の父って年じゃないじゃん。むしろ兄貴って感じ？」

「もしかしたら、その才能を少しでも見習えってことじゃないかな？」

「景、お前案外失礼なやつだな。」

「いや、少しでも兄さんを励ましたくって。それに・・・」

そういうと、少ししゃがんで（うう、俺がもうチヨイ高ければ）耳元で

「なんだか今回のこと、僕にも納得いかないことがあるんだ。少し僕のほうで調べてみるから、兄さんも気をつけて。」

「何かって何だよ。」

「さあ、杞憂ならいいんだけど。」

なんだか、いきなり脅されたな。

あ。

「そっぴや、俺って苗字どうなんだろ？」

言った瞬間景はガクツとしていた。

「どうしたんだ？」

「いや、こんな重要な話してたのにいきなりそんなこというなんて、

兄さんらしいと思って。」

俺はちよつとムカツとして、

「うるさいな、苗字も十分重要的ことだろ。テストとかでどっち書くんだよ。」

そういつたらくすつと、景のやつ笑って

「本当に兄さんはかわいいな。」

なんていいやがった。

「おい、いつも言ってるんだろ。男にかわいいは褒め言葉じゃないんだよ。」

「ごめんごめん。とりあえず近江姓のままでいいんじゃないかな。」

「倅様、景様。夕食の時間です。」

「ああ、今行く。」

「兄さん。」

「ん？どうした。」

「気をつけてね。」

この言い方がどこか俺の心に残り続け、次の日俺は高鳥家へ向かった。

act・2 高鳥家

「あんのくそ親父」。

俺は、今高鳥の家の前にいる。

そして、こんな暴言を吐いているのにはわけがある。

それは、

「『邸』っていうから、もっとわかりやすいもんだと思うだろう」。

そう、俺は今朝、せつかくだから歩いて行こうと思い立って、ここまで歩いてきたのだが、まったく邸と呼べるような建物はなくて、迷いに迷ったのである。

まあ、それでも周りの家に比べれば浮いているくらいだけど。

それにしても、どうしようかな。

着いたのはいいんだけど、なんとなく緊張する。

新しい父さん。これから一緒に暮らして行くんだからな。

いい人だといいな。

まあ、有能な人らしいから、きっと大丈夫だ（根拠なし）。

そして決心が固まりインターフォンを押そうとした瞬間。

「家に何か用か？」

「うひゃあ。」

突然後ろから声をかけられ驚きのあまり変な声を出してしまった。

・・・恥ずかしい。

「ああ、近江のこの子か。」

後ろを見ると、二つのスーパーの袋を持った人がいた。

その顔を見た瞬間僕はボーっとしてしまった。

すげーかつこいい。

実は俺、今まで景以上にかつこいいやついないと思ってたんだけど。

「何をボーっとしてるんだ。少し手伝ってくれ。」

そういうと、スーパーの袋を俺に渡してきた。

その後、家に入り、袋の中身を冷蔵庫に入れ、この人について書斎に入った。

「自己紹介がまだだったな。俺は高鳥^{たかとり}京介^{きょうすけ}。今日からお前の父親だ。

」

それでも、まだボーっとしてたので

「ん？どうしたんだ。」

かつこいい、とはいえず、

「あ、え〜と。今日からお世話になる近江倅です。よろしくお願ひします。」

最大限に礼儀正しく言った。

「うん、よろしくな。それと、父さんとか呼ばれるのはさすがに嫌だから、京介さんとかでいいぞ。」

「うん、わかった。それにしても、さっきからまったく家政婦さんとか見当たらないんだけど。」

「俺は、一切そついうのは置かないから。基本家事はお前の仕事だから。」

俺は、頭を鈍器で殴られたような気がした。

「は〜！俺そついうのまったくできないんだけど。」

「大丈夫だ。一つ一つ教えていってやる。」

「そんな、絶対無理だよ〜。」

そついった瞬間、今までニコニコしていた京介の顔から笑顔が消えた。

「無理じゃない。俺がやらせるっていつてんだ。」

その顔がちょっと怖くって俺はコクンとうなずいてしまった。

「わかればよし。」

そういつて、俺の頭をなでてきた。

もしかしたら、俺は厄介なのにつかまったのかもしれない。

act・3 家事

それから、俺は京介に毎日行すべき家事を叩き込まれた。

洗濯、掃除、風呂焚きetc。

あらかたやり方は教えられ、残るは料理だけとなったが・・・。

「本当に料理だけは無理なんだってば。」

弱音を吐いているのだった。

なんてったって、自慢はできないが料理なんて学校の実習でさえ食べる側に回る（つまりサボってる）んだ。

「大丈夫だ。今までだって何とかこなしてきたじゃないか。」

そういわれ、とりあえずさっき京介が買ってきた野菜を切っていくことに。

「本当にお前家事やったことないんだな。」

その切った野菜のあまりのお粗末さに、とうとう京介がため息をついた。

「う、うるさいな。大体なんで京介さんはでkindだよ。」

そういつて少し集中を欠いた瞬間。

「っ痛。」

やってしまった。

ざっくりやってしまった。

「おい、大丈夫か？指見せてみる。」

うわ、さっきまでちょっと遠くにいたのに。

案外、面倒見はいいんだよね。

と思っていたら、

クチュッと口にふくまれた。

「な、何してんだよ〜！」

「何って、消毒だよ。」

「消毒って、こういうのって自分でするもんだろ。」

そういつて指を取り返したが、また血が出てきてしまった。

「やばっ」

そうして口にふくんだら

「間接キス。」

なんてニコニコしながら言ってきたがった。

「ち、違う。これは、あの・・・。」

「気にするな。親子だろ。それに、」

取り出したのは絆創膏だった。

「あるんなら最初から出してくれよう。」

そうして、傷口をとめてくれた。

「仕方ない。料理は俺がやってやるか。」

「え、本当。」

「ああ、毎日やってやる。だけどひとつだけ俺の願いを聞いてくれるか？」

「うん、聞く聞く。」

痛い思いはしたが、結果よしだ。

「じゃあ、今晚俺と一緒に寝よう。」

「なぐんだ、そんなことか。別にいいよ。」

そういったら、京介はまじまじと俺を見て、

「案外素直なんだな。」

「何が？」

「いや、少し抵抗されるかな、と。」

「別に、家でも景とかとよく一緒に寝てたし。」

そういつたら、少し京介はムッとして

「景？」

「ああ、俺の弟。」

「そうか、それじゃあ今日は一緒に寝よう。」

そういつて、黙々と料理をはじめてしまった。

あれ？なんか怒ってる？

その怒ってる理由は分かんなかったけど、その後作ってもらった料理はすごくおいしかったんだ。

a c t . 4 いろいろなこと（前書き）

更新が早くできて、うれしい限りです。

皆さんにも楽しんでいただけたら幸いです。

act・4 いろいろなこと

ご飯を食べて、風呂に入って、京介の部屋に入る頃、俺はさっき京介がちょっと怒っていたことなんか忘れてしまっていた。

「お先に失礼しました。」

「こらこら、まだ少し頭がぬれてるだろ。」

そういつて、俺が肩にかけていたタオルを取り、頭をこしこし拭いてくれた。

「エヘヘー。ありがとう。」

そういつた瞬間、京介はちょっとそっぽを向いてしまった。

「何。なんか怒らせた？」

そういつて京介の肩にもたれかかると、

「お前、何かさっきと違ってハイだな。」

「うん、風呂入るといつもこんな感じ。」

そうして、部屋を見回すと

「京介さんの部屋って結構本とか置いてあんだね。」

よく見ると、経営学とかいろいろ置いてあった。

「ああ、読みたい本があったら貸してやるぞ。」

「いいよ。俺が読んでも分かんなさそうなやつばっかだもん。」

そうして、ベットに飛び込んだ。

「うわ。結構ふかふか。俺さ、大人って固いベットの方が寝やすいのかなって思ってたんだけど。」

「いや、俺はやっぱり柔らかい方がいいと思うが。」

「そうなの。じゃあ、俺も大きくなっても柔らかいベットのままにしよう。」

ベットでごろごろしていると、

「お前って変なやつだな。」

「な、何だよいきなり。」

さすがにいきなり変なやつとはないだろう。

「いや、普通、思春期には一緒に寝るとか結構嫌なもんだろ。」

「あ、俺ってさ、昔っから母さんに嫌われてるみたいでさ、小さい頃いっつも一人で寝かされてたんだ。だからさ、誰かと一緒に寝ることって結構抵抗ないんだ。」

「すまないな。」

「え？」

「嫌な事を思い出させてしまったか？」

「別に、昔は確かにさびしかったけどさ、もう昔のことだし、俺、昔のことは気にしない主義なんだ。」

「倅は強いな。」

そういつて頭をなでてきた。

「もゝ、子供扱いすんなよなゝ。」

何でだろう、京介にこういう風にされるのは嫌じゃない。むしろ・・。

「そういえば、京介さんは、何で一緒に寝たかったの？」

そういうと、京介は少し黙ってから、

「昔見たテレビで、家族と一緒に寝ていた姿が映っていて、それが本当に幸せそうだったんだ。それに憧れたから。」

そついわれて、俺は思わず笑ってしまった。

「何が可笑しい？」

少しムツとされて言われて、

「ああ、ごめんなさい。なんだか京介さんってすつごくかつこいのに、庶民的なこと言っただな〜って。」

「もういい、寝るぞ。」

何か、照れた京介さんってかわいいな〜、なんて口には出せないけどね。

ベットに入ってくると京介さんはいきなり俺を抱きしめてきた。

「何だよ〜。苦しいよ〜。」

「いや、抱き枕にちょうどいいかなって。」

「仕方ないな。まあ京介さんのお願いだし、今日は我慢するよ。」

改めて、近くで京介を見ると本当に美形だ。

そのことで少しドキッとしてしまった。

「おやすみ、京介さん。」

「ああ、おやすみ。」

どうやら、今日はいろいろ忙しかったので、俺はすぐに眠りに落ちてしまった。

「ふわ〜。」

あれ、なんだかいつもの場所と違うような・・・。

ってそうか、昨日養子入りした京介の家に来たんだけ。

うわ、横に超美形の人が寝ている。

本当に京介ってかっこいいよな〜。

あれ、よく見てみると髪の色、黒じゃないような・・・。

気になって触ってみようと思ひ手を伸ばすと、

「どうかしたか？」

「うわ〜。京介さん、起きてたの？」

「ああ、襲われそうになったからな。」

「ち、ちが。そうじゃなくって、京介さんの髪、色が黒じゃないな〜って。」

「ああ、少し茶がかったているな。」

「もしかして染めてるの？」

「いや、元からだ。」

「あ、そうなんだ……。」

「それより、お前、時間は大丈夫か？」

「へ？どういうこと？」

「今日は月曜日だぞ。」

「…………あー！」

そうだった、今日はもう学校の日。

時間は、7：30を超えたところ。

「やばい、急がないと。」

急いでベットから降りようとしたら、なにやらクスクス笑う声が、

「お前って、あわててる姿もかわいいな。」

「な、そんな場合じゃない。急がないと遅刻。」

「まあ、あわてるな。始業は8：20だろ。」

そう、だから一時間前には出ておかないといけないのに。

と思っけると、京介は窓の前に行き盛大にカーテンを開けた。

「うわ、眩しい。」

「ほら見てみる。」

「ん？」

なにやら坂の下のほう（ここは少し小高い丘の場所なのだ）に見慣れた学校が。

「うそ、ここって学校の近くなの！」

横からはぐつとため息が漏れた。

「お前は、昨日どの駅で降りたんだか……。」

「仕方ないだろ。だって新しい家に行くのに緊張してたし、ここ探すのに必死だったし。」

「はいはい、まあ近いとはいえ、そろそろ急がないと。」

そうして、階下に行き、京介の朝食作りを手伝って朝食にした。

「でもさ、俺の学校がたまたま京介さんの家の近くなんてすごい偶然だね。」

言った瞬間盛大に笑われた。

「ああそうか、お前は知らなかったのか。俺はあの学校の理事も務めてるんだよ。だから近いのは当たり前。」

「えゝ、そうだったの。」

「まあ、まだ入学したてのお前は知らなくても当然だけだな。」

そうして、京介は、

「あと、言い忘れてたが、俺は、平日は忙しいことがほとんどだ。朝は用意してやれるが、夕食はその場では用意してやれない。だから作り置いたのをあつためて食べる。」

「えゝ、京介さん帰り遅いのゝ。」

「なんだ、寂しいのか？」

ム力、

「別にそんなことないもん。」

「わかったわかった。なるべく早く帰れるようにはするよ。あと、昨日教えた家事はきっちりやって置くように。」

「わかった。」

そうして、俺は半ばゆっくりとした朝を送り、登校していくのだった。

act・6 学校生活

結局、朝ゆつくりしすぎたせいで、学校には走ってくることになってしまった。

ここで、この学校の説明をしておこう。

ここ、東稜学園とうりょうがくえんは半寮制の高校だ。

一応中高一貫校だが、高校からの外部生と内部生の割合は半々くらいだ。

俺は、高校からの外部生。

一応寮もあるってことで、結構広い範囲から生徒が集まる。

まあ、大体こんな感じの学校だ。

「おい倅。相変わらず遅刻ぎりぎりの登校だな。」

「うるさいなシュン、寮生と違ってこっちは遠いんだよ。（まあ、実際は近くなっただけだね）」

このシュンというのは、同じクラスの相沢俊一。あいざわしゅんいち

俺の高校最初の友達だ。

ちなみに、寮生。

「お、じゃあ倅も一緒に寮生活するか？ちょうど俺の相方いないし。」

「いゝや、遠慮しとく。」

「ちえ」

シユンとは、本当に昔からの友達みたいに仲良くなった。

それというのも、初登校の日。

外部生ということ、すごく心細かった俺に、気さくに声をかけてくれたのがシユンだったんだ。

それから一週間ぐらいは、本当にシユンにべったりだった気がする。

「倅ってさ、結局部活決めたのか？」

「ああ、バスケ部に入ろうと思ってんだけど。」

「お前、それってすっげゝ邪な考えだろ。」

「な、邪な考えって何だよ。」

「身長。」

「う、」

「図星か。」

「うるさいな、バスケの選手ってみんな背が高いじゃん。すっげー憧れるんだよ。てゆうか、理由はそれだけじゃなくて、俺、一応中学でもバスケ部だったんだよ。」

まあ、あんまりうまくはなかったけど。

「倅ってさ、足すっげー速いんだからさ、俺と一緒に陸上部はいんね。」

「え、ああ。なんかそれも面白そうだな。」

「だろだろ、せっかくだし心機一転って感じでいいと思うぞ。それに、陸上部の先輩たちすっげーいい人たちだし。」

「うん、じゃあ、早速仮入部届けだしてくるは。」

そうして、瞬く間に授業は終わって放課後。

「倅。体育着持ってきてるか？」

「うん、持ってきてるけど。」

「先輩たちがさ、早速来てもらいたいって言ってるからさ。」

「うんわかった。」

そうして着替えて陸上部の練習場に着くと、長身のさわやかそうな人と、なんだか精悍な顔つきの人がいた。

「あ、真中先輩、沖下先輩。こんちはー。こいつがさっき言ったや

つです。」

「はじめまして、近江倅です。よろしくお願いします。」

「ああ、君が。僕は陸上部主将、真中隼人。まなかはやよろしくね。」

「俺は陸上部副将、おきしたかずや沖下和也。」

「ああ、こいつの無愛想はデフォルメだから気にしないでいいよ。でもすげーいいやつだから。」

「無愛想は余計だ。」

「それにしても、本当にシュンの言ってた通りの子だね。」

「シュン、俺のことなんて言ってたんですか？」

「うん、すごいかわいいやつがいるんだっていつも自慢してたよ。」

「シュン。男にかわいいはほめ言葉じゃないっていつも言ってるだろ。」

「ああ、悪い悪い、倅お許しを。」

「ああ、まったく。」

「気を取り直して、」

「えーと、ほかの方々は？」

「ほかの方々ってゆうか・・・」

「これで全部だ。」

「えゝ。じゃあ3人なんですか？」

「そう、今陸上はこの学校では人気はない。でもきつと僕がこの部に栄光を。」

真中先輩は決意の表情をして言うと、

「あいつの、あれは毎年だから気にするな。」

沖下先輩の注釈が入った。

「そんなことより、倅君。早速君に少し走ってもらいたいんだけど。」

「ああ、わかりました。」

さつき、アッシュに履き替えているから、いつでも準備万端だ。

スタートラインに着く。

さあ、心を落ち着けよう。

「よい、ドン」

走る走る。

無心に、ただ走り続ける。

ゴールに着くと真中先輩は驚いた表情をしていた。

「50メートル5・9。陸上とかには入ってなかったんだよね？」

コクンとうなずくと。

「すごい、これなら文句なしだ。一緒にインハイ目指してがんばっていこう。」

「はい、よろしくお願いします。」

その後、通常の練習メニューを聞いて、少し体を動かし早めに切り上げた。

教室に戻ると、

「ほらな、言ったとおり楽しかっただろ。」

「うん、先輩たちもすごくいい人だった。真中先輩は面白いし、沖下先輩は意外にやさしいし。」

「よしよし、じゃあ明日は入部だな。」

「あ、じゃあ早速入部届けの書類、事務室から取ってくる。シユンはここで着替えて待ってて。」

「了解。」

急いで一階の事務室へ急行しようとしたが、降りる瞬間人とぶつかった。

「あ、ごめん、急いでたから。大丈夫？」

ちょっと走っていたので、素直に謝った。

「ああ、平気。君こそ大丈夫。」

「ああ、俺は大丈夫。」

「おい秀〜。」

「あ、ごめん。呼んでるから。」

そうして、彼も声の主のほうに小走りに駆けていった。

「本当にごめんな〜。」

「気にしないで〜。」

いいやつだな〜と思いつつ、俺はまた事務室へと向かった。

書類を取った後、シュンと一緒に帰った。

この秀と声の主がこの後、大きな影響を与える事をこのとき俺は予想していなかった。

a c t . 7 いない

「あゝ疲れたゝ。」

今日はいろいろあったなゝ。

陸上部も楽しそうだし、学校も近くなったしさゝ。

「たっだいまゝ。」

あれ？

あ、そうか。京介遅いつて言つてたっけ・・・。

家の中は、しゝんと静まり返っている。（鍵は前日渡されているのだ）

なんだか、えゝと、寂しい。

よく考えたら、いっつも景とかが近くにいてくれたから、家で一人つてあんましないんだよなゝ。

やばい、改めて直面するとさらに寂しい。

そうだ、とりあえず京介が作つてくれたご飯でも食べて気持ちを落ち着けよう。

そう思つて冷蔵庫を開け、作り置きを温めて一人でご飯を食べてい

ると、

「つく。」

やば、ちょっと寂しさで涙が。

ていうか、これじゃウサギじゃん。

あゝ、俺ってこんなに寂しがりやだったんだゝ、なんて考えてるうちにどんどん涙が、

「うつく、京介さゝん。」

思わず呼んでしまうと、

「呼んだか？」

「うわゝ。」

後ろに京介がいた。

「な、なんで？遅くなるって。」

「ああ、朝のお前を見てたら心配になっただな。」

そして、京介さんは俺をじっと見ると、

「なんだ、泣いてたのか。」

意地悪そうに笑ってそういった。

「な、泣いてなんかないもん。ちょっと寂しかったただだよ。」

「はいはい、それにしても困ったな。これじゃあ、おちおちゆっくり仕事もできん。」

あ、やばい、俺京介に迷惑かけてる。

「ごめんなさい。」

「別に気にするな。お前に頼られてると思うと、悪い気もしないしな。」

「で、でも、俺のせいで仕事とかに影響が出たら・・・」

俺は思わず下を向いて、

「・・・いやだよ。」

そういうと、京介は俺の頭をクシャクシャとなでて、

「それじゃあ、犬でも飼うか？」

「え？」

「ただし、お前が責任を持って世話をするというならな。」

「俺が犬を好きって？」

「ああ、知ってる。近江の家の番犬と仲良く遊んでただろ。」

「え、何でそのこと？」

「前に、一度近江の家に行ったときたまたま見つけてな。」

そう、家に景がないときは、たいてい犬と一緒に遊んでたのだ。

散歩とかもよくしてたし、俺って犬大好きなんだよね。

「あの時、あんまりにも楽しそうにお前が遊んでるのを見て、ずっと覚えてたんだ。」

そうして、

「ただし、お前が本当に責任を持てるというならな。」

「うん、大丈夫。俺本当に犬好きだもん。」

「じゃあ、今度見に行こう。それまでは、寂しくても泣くんじやないぞ。」

「な、だから泣いてなんか。」

「はいはい、わかったわかった。それより、家事の方はどうした？」

あ。

「まったく、じゃあ飯食ったら、手分けしてやっていくか。」

「うん。あ、それとね、俺陸上部入ったんだ。」

「へへ。倅は足速いのか？」

「うん、今日先輩が褒めてくれた。」

言った瞬間少し京介の表情が強張ったような気がしたが、

「そうか、よかったな。」

次の瞬間にはもう戻っていた。

「それじゃあ、その冷凍モンだけじゃ、足りないだろ。これから作ってやるからちよつと待ってる。」

「え、わーい。京介さんありがとう。」

そつ、本当に足りなかったのだ。

「京介さんって本当に面倒見がいいよね。」

そついったら、

「バカ、お前だからだよ。」

「え？」

え、え。何、なんか、京介さん真剣な目。

え、これって？

そうしたら、次の瞬間、

「できの悪い子ほどかわいってな。」

ムカッ。

「何だよそれ、俺は悪くなんか無い。」

「一人で寂しくて俺の名前を呼んでもか？」

「あ、だからそれは・・・。」

次を言おうとしたら、突然抱きすくめられ

「俺以外の名前なんか呼びながら泣くんじゃないぞ。」

「ど、どういうこと？」

そういうと、京介は、はっとため息をついて小声で

「本当に箱入り息子だな。まあいい、これから教えていってやるかな。」

と言った。

俺はうまく聞き取れず、

「なんか言った？」

「別に。それじゃあ、今から作ってくるから待ってろよ。」

そういつて俺から放れてキッチンに向かっていった。

「何なんだよ。」

まったく、親子ってこんなスキンシップを取るもんなのか？

それにしては、ちょっとドキッとしたって言うか・・・。

結局、そのことが気になって、料理もうまく味わえなかった倅でした。

act・8 気になること

ご飯を食べて、家事をやり、風呂に入った後、俺はさっきのスキンシップが気になって京介の部屋に向かった。

でも、なんて聞こう？

ていうか、普通にあることなんじゃないかな？

でも気になるし……。

そうやって、部屋の前でうろつろしてたら、

「おい、倅、どうかしたか？」

部屋の中でも、気づかれてしまったみたいだ。

そして部屋の中に入ると、

「どうした？一人で寝るのが怖いのか？」

「な、そんなわけないだろ。」

くっそ、からかいやがって。

「じゃあ、何か用か？」

「えっと。」

そういわれてしまうと、なんだか直接は聞けないよ。

俺は少し話題を切り替えて、

「京介さんって勉強熱心なんだね。」

と、話題をそらした。

事実、今京介は経営についての本を読んでいた。

「ああ、日々努力をしないと、世の中においていかれてしまうからな。」

や、やばい。めっちゃかつこいいよ。

外見だけじゃなくって、中身もかつこいい人が、本当にかつこいいんだな。

あ、それじゃあ、

「ごめんなさい、邪魔しちゃった？」

「別に構わない。勉強だけじゃなく親子のスキンシップも重要だからな。」

ああ、やっぱりさっきのも、スキンシップなのか。

なんだか、過度な気もしたけど別にそうじゃないのか。

そう思ったら、少しがっかりした自分がいて、少し驚いた。

そうして、ふと机の端っこを見ると、なんだかちよつと厚めの本の
ようなものが置いてあった。

「なにこれ？」

「あ、それは。」

へへ、珍しい。ちよつと京介さんがあせてる。

なんだか新鮮で、思わずからかいたくなってしまった。

そうしてその見開きを見ると、

「え？お見合い写真？」

すぐに京介さんに取りられてしまったが、それは確かにお見合い写真
だった。

「そ、そうだよな。京介さんも大財閥の当主だし、24歳だし、そ
ろそろ結婚なんだよな……。」

言っていて、少し心がずきつとした。

何でだろう、おかしいな。

「うちの母が勝手に持ってきたんだ。俺には関係ない。」

「でもさ、もし結婚とかなったら、俺ってさ……。」

言いたくないが、ここははっきりと

「・・・邪魔だね。」

やば、なんだか最近涙腺がゆるいみたいだ。

涙が溢れてとまらない。

「おいおい、泣くな。邪魔なんてことあるわけないだろ。」

「でもさ、実際そうじゃん。」

ここで、前に思っていた大きな疑問がまた出てきた。

「じゃあ、何で俺の養子入りなんて受けたの？」

「それは・・・。」

答えてくれない、もしかして。

「親父が圧力かなんかかけたの？」

あの親父ならやりかねない。

今急上昇中の高鳥家だって、古参の近江家にはまだかなわない。

それに親父だったら、急上昇中の高鳥と手を結べる方法なら、手段を選ばない気がする。

でも、そうしたら、

「そんなんじゃない。」

「じゃあ、何で？」

「それは……。」

「何で答えてくれないのさ。俺だって知る権利はあるはずでしょ。」

そういつても京介は答えてくれない。

何でだよ、どうして。

いつもの京介さんじゃないみたいだ。

俺は、部屋を飛び出し、自分の部屋に走った。

「つく、何でだよ。」

少しして、部屋の扉を叩く音になるまで俺はひとしきり泣いた。

act・9 仲直り 恋の予感

「倅、入ってもいいか？」

「・・・今は話したくない。」

「お願いだ、倅。」

う、逃げてばつかじゃ始まらないか。

「・・・いいよ。」

「ありがとう。」

京介は部屋に入ってくるとまず、俺を抱きしめた。

「ごめんな、お前を不安にさせて。」

ほんと、ずるいな。

こんな風に、切羽詰って言われたら、許すしかなくなるじゃん。

「まず、さっきのこと、お前が邪魔なんてことは決してない。それだけはずっと覚えててくれ。」

「うん、わかった。」

「あと、お前を養子に迎えた理由だけど、本当に悪いんだが今は言えないんだ。でも、俺はお前といられて楽しいし、嬉しい、今はこ

れだけしかいえない。」

「うん、わかった。」

「言つべきときが来たら絶対言つ。だからそれまで待っていてくれるか？」

「うん、わかった。」

「ふゝ、やっと収まったか。」

そついうと、京介は意地悪い表情になって、

「お前、さっきあのお見合いの写真見て嫉妬してただろ。」

「な、そんなわけないだろ。」

「いいんだよ、子供が親を独占したいって気持ちはわかるからな。」

そんなんじゃないんだ、俺もしかしたら…。

「ん？何赤くなつてんだ。」

「ば、赤くなんて。」

親子って強調されると本当に心が痛む。

でも、こんなこと京介には絶対いえない。

だって、そんなこといったら…。

やっぱり、京介を困らせることになる。

うつむいてみると、

「…倅。」

とびっきりの優しい声でそう話しかけられた。

「俺は、嬉しいよ。お前が、俺のことそんなに思ってくれてるなんてさ。」

「だ、だから、独占したいとかそういうのは…。」

「あるんだろ。」

「う。」

「お前って本当に表情に出やすいんだな。」

「だって、俺…。」

「俺だってそうなんだよ。」

え？

「俺だってお前を独占したい。学校とか弟とかの話聞くと嫉妬しまう。でもさ、こつやってお前が俺を思ってくれてる。それだけで今は十分なんだ。」

そういつて、俺の頭をクシャクシャなでると、

「だからさ、不安になるかもしれないけど、今は俺を信じる。俺はお前のそばから離れないから。」

そうして、真剣なまなざしになって、

「その代わり、お前も俺から離れられると思うなよ。」

「ずるいよ、京介さんは。」

「何がだ?」

「だって、いつもはクールなのにこんな。」

「悪いな、本気の俺はこうなんだ。」

「でもさ...。」

「ん?」

「俺も、本当に嬉しい。」

思いつき笑顔でいったら。

「っ。」

いきなり京介は俺を放して、

「じゃあ、もう気は晴れたな、おやすみ。」

そういつて部屋を出て行ってしまった。

「ど、どうしたんだ？いきなり。」

でも、気持ちもすつきりして、俺はその夜ぐっすりと眠れた。

部屋の外で、

「やばいな、このままじゃ、本当に犯罪者になっちまう。」

そう京介が言ったのは俺には聞こえなかったんだ。

それから、俺はすっかりと家事も部活もこなし一生懸命がんばった。

犬を飼うまでは京介も早く帰ってきてくれるから寂しくないし・・・。

いや、寂しいってわけじゃないんだけど、やっぱり一緒にいると安心するって言うか・・・。

まあ、なんだかあの日以来、京介が俺のことじっと見てることがあるような気がするんだけど。

そうして、今日は金曜の夜。

明日からは休日だって時（うちの学校は、週休二日制）

「倅、明日と明後日は何も用事がないか？」

「うん、別にないけど、どうして？」

あ。

「もしかして、犬のこと？」

ぱっと明るくなって聞いてみたんだけど。

「いや、悪いんだが今週は違うんだ。」

「えゝ、そつか残念。」

ちよつとしょんぼりしてると、

「来週には一緒に見に行つてやるから、それまでは俺で我慢しろよ。」

そついつて、頭をくしゃくしゃとなでられた。

ほんと、京介以外だつたらこんなことされたら、子供扱いすんなゝ、つて怒りたくなんのに……。

「ん、京介さんが一緒にいてくれんなら、別にいいけどな。」

そついつてにつこり笑つたら、

「あゝ、さっきのことなんだけどな、」

そついつて手を引つ込めてしまった。

そつ、なんだか最近こつやつてにこつとかすると、少し離れていつちやうんだよな……。

ちよつとそれが今の俺の不安になってたりするんだけど……。

「実は、お前のことそろそろ母に会わせないといけなくなてな。」

「え？京介さんのお母さん？」

「そう、今高鳥の当主は俺ってことになってんだけど、実際は母の力もそれなりにあるんだ。」

「へー、そういえば俺、京介さんの家ってどういう感じなのか聞いたことなかったんだけど。」

「ああ、せっかくだから話しておくか。まず、さっき言った母。父は先年病気で亡くなった。兄弟は上に姉が一人、下に弟が一人いる。姉はすでに結婚していて、双子の子供がいる。」

「え、双子？」

俺、実はまだ双子って見たことないんだよね。」

だからあつたらきつと楽しいんじゃないかって思ってたんだけど、

「ああ、二卵性らしいがな。」

「ニランセイ？」

「つまり、顔つきとかが酷似してるわけじゃないってことだ。」

「な〜んだ。」

ちょっと、残念かも。

「それで、その二人は今何歳ぐらいなの？」

「ああ、倅と同年だよ。姉は早くに結婚したからな。」

「え、じゃあ結構、お姉さんと京介さんって年離れてるんだ。」

「ああ、昔はそのまま姉さんが当主になるって話も出たほどらしいぞ。」

へ。でも、同い年の子か。仲良くなれるといいな。

「まあ、こんなところか。それと一応明日は親族集会ってことになるからほかにもいろいろな人が来るからな。倅も会場内を走り回ったりしないようにな。」

「な、俺は子供じゃないっての。」

「はいはい、それじゃあ明日は泊まりになるから、用意して来いよ。」

まだ、子ども扱いされたことに怒ってたいけど、それよりも明日のことが楽しみで、とりあえず引き下がった。

「なんだか、最近京介さんにつまくあしらわれてるような気がするな。」

こう思う今日この頃である。

「うわゝ、すごい。」

俺と京介は今、高鳥の本家の前に来ていた。

「そんなに驚くことか？」

「うん、だって家も京介さんの家も洋風だからさ。こついう和風な感じのところは初めてなんだ。」

そう、ここ高鳥の家は完全な和風な感じだった。

なんていうか、お屋敷って感じがぴったり来る感じ。

「まあ、ここは俺の父の趣味みたいなのが入ってるからな。」

「え？」

「いや、時代物のドラマとかが好きだったんだよ。」

「へゝ、そうだったんだ。」

だからといって、こんな屋敷まで建てちゃうなんて・・・。

「父も内装には結構凝ったらしいから使い勝手もいいんだがな。」

なんだか京介、かなり感慨に浸ってるみたい。

「お父さんってどんな人だったの？」

「ん？」

京介はこっちを向くと、

「そうだな、優しい人だったよ。まあ、俺はこういう贅沢は嫌いだから結構ぶつかった事もあったけど。」

「そっか・・・。」

やっぱり寂しいんだろうな。

「それより、さっさと母さんのところに行こう。遅く行くといろいろうるさいから。」

そうして屋敷の中へ入っていった。

中の家政婦さんに奥座敷に通されそこで少し待っていると60くらい
の女の人が現れた。

「久しぶりね京介。元気そうで何よりです。」

「お母さんも元気そうで。」

儀礼的な挨拶が終わると、俺のほうを見て

「あなたが近江から来た・・・。」

「あ、近江倅です。はじめまして。」

ぺこっとお辞儀すると

「こちらこそはじめまして。そんなにかたくならないでいいのよ。あなたは京介の息子。私の孫に他ならないんだから。」

あ、なんだかすごく優しくそうな人。

「それで京介、日奈や玲介にはもう会った？」

「いえ、これから会いに行こうと思っています。」

「今日は亮司さんは来られなかったみたいだけど、鴻君と秀君は日奈が連れてきてるみたいだから、あとで倅君にも紹介してあげてね。」

「はい、母さん。」

「それじゃあ倅君。またあとでね。」

「あ、はい。」

そういうとスツと立ち上がって部屋を出てってしまった。

「それじゃあ姉さんのところに行くか。」

「あ、あのだ。」

「ん？」

「いや、いろんな人の名前が出てきて混乱するっていうか……。」

「ああ、会ってから紹介するから気にするな。」

そういわれてもな。

そして奥座敷を出て庭に面した3つの部屋のうち一番手前の部屋で、

「姉さん、失礼します。」

「どうぞ。」

部屋に入るとかなり美人の人がいた。

「京介、久しぶりね。あらその子……。」

「ええ、私の養子の……。」

「近江倅です。はじめまして。」

「あら、ご丁寧にも。私は香芝日奈^{かしはひな}。京介の姉よ。ちょっと待っててね。」

そうして日奈さんは部屋の隣の部屋に、「鴻、秀、ちょっといらっしやい。」

そう呼んだ。

「何、母さん。」

二人の子が入ってきた。

そうして一人を見て、

「あ、君は。」

「あ。」

向こうも気づいたみたいだった。

「何だゝ秀、知り合いなのか。」

「うん、ちょっとね。」

「そっか。俺は香芝鴻。」

「僕は香芝秀。似てないけど一応双子なんだ。」

「あ、俺は近江倅。」

「それにしても京介叔父さんが養子を探ってたって聞いたけど、同じ学校だったんだね。」

「え、同じ学校なのか、秀？」

「うん、鴻はおバカさんだから気づいてなかったんだよね。」

「誰がバカだよ。」

それを秀は軽やかに無視し

「僕は一応東稜で生徒会に入ってるんだ。だから君の事は母さんから近江つて聞いたときにすでに知ってたんだ。まあ顔までは知らなかったんだけどね。」

「え、生徒会！」

そう、うちの生徒会は優秀なメンバーでのみ構成されてる。

「そ、まあ鴻は僕にくつついて入りたがってたんだけどいかんせんバカだからさ。」

「バカって言うな。俺だってなあ・・・」

また軽やかに無視して、

「それじゃあ倅君よろしくね。」

「こら、無視すんじゃない。」

なんだか本当に個性的な人たちで埋まってるんだな、と思う倅だった。

act・12 本家？ 嵐の予感（前書き）

こんにちは。

なんだかあつという間に12話です。

こうやって書き続けられるのも皆さんのおかげです。

本当にありがとうございます。

質問、誤字、脱字等ありましたら、気軽に感想によりしくお願いします。

act・12 本家？ 嵐の予感

「ほんつといろんな人がいるんだね。」

「ああ、まあ確かに個性的な人間は多いな。」

あんたが言つなよな、とは決して言わない。

「まあ、なんにせよ挨拶しておくのはあと一人だ。」

そういつて庭に面した三つの部屋のうち一番奥の部屋（一番手前は日奈さん、二番目は秀と鴻の部屋。）の前に行き、

「玲介、いるか？」

部屋の中はシーンと静まり返っている。

「何だ留守なのか。」

その次の瞬間

「わ、何だこのちっこいの、可愛い。」

「うわ。」

いきなり後ろから抱きつかれた。

「おい、玲介。」

「あ、兄さん久しぶり。ねえねえこいつ例の？」

「ああ、倅だ。」

「おい。放せよ。」

じたばた玲介の羽交い絞めから逃れようとしていると、

「おい玲介、そろそろ放してやれ。」

「え、いいじゃん別に。」

そついった直後、京介は怖い顔になって、

「放せといっている。」

「わかったわかった、ほんと兄さんは冗談が通じないな。」

ぱつと放され、俺は玲介にガッルと威嚇する。

「自己紹介が遅くなったね、俺は高鳥玲介。たかとりれいすけ今は大学生だよ。」

握手を求めてきたが、俺は京介の後ろでまだ警戒する。

「あはは、なんだか嫌われちゃったかな。」

「当たり前だ。」

「でも兄さんの所に来てたのがこんなに可愛いやつだったなんて、今度兄さんとこに遊びに行ってもいい？」

「絶対に来るな。」

「何だよけち。倅君独占なんてずるいぞ。」

「ずるくない。俺は父親だ。一緒にいるのが当たり前だろ。」

「ちえゝ。倅君、兄さんに愛想尽かしたら俺のどこに来ていいからね。」

につこりと微笑みかけられたがもちろん無視の方向で。

「倅、行くぞ。俺たちの部屋は離れに取っておいたらいいから。」

「あ、うん。」

俺は背後にいる玲介に細心の注意を払って京介についていった。

玲介は微笑みながら俺たちに手を振っていた。

離れにつくと、

「何なんだよあの人は。」

「ああ、あいつは小動物系の人間を見るといっつもああなるんだ。」

「って誰が小動物系？」

「お前しかいないだろ。」

「くっそ、見てろ、今に俺だつて・・・。」

「今でも鴻には飛び掛っているぞ。」

「え、鴻に！」

確かに鴻も俺に劣らずちっちゃいからな。

「まあたいてい秀に阻まれているがな。」

確かに秀はおつきいからな。

「それにしても、本当にあの二人似てないんだね。」

「ああ、双子っていつでも似てないやつらは似てないんだな。」

「でも、さっきはありがと。」

「何が？」

「いや、あの人に捕まってたとき・・・。」

あの時、京介は本当に怒っていた。

俺のためにあんなに怒ってくれるなんて素直にうれしかったんだ。

「ああ、あれは当然のことだ。倅も嫌がってたしな。それに・・・。」

「なんだか京介の俺を見る目がいつもと違う。」

ちょっと色っぽい？

「あ、俺さちよつとトイレ行ってくる。」

なんだかこの雰囲気が少し恥ずかしくなってしまうそうだった。

「大丈夫か、この屋敷広いから一緒に行くか？」

「大丈夫だよ。俺、子供じゃないんだから。」

そういつて部屋を出た。

トイレに行つて用を足すと、改めてさっきの雰囲気が普通じゃなかった気がする。

ふつと一息ついた瞬間、

「京介さんもかわいそうよねー。」

という声が外から聞こえてきた。

え？

どうやら廊下から話しているみたいなので、トイレの入り口で隠れて聞き耳を立てると

「結婚もまだなのに子供を引き取らされるなんてねー。」

「それにその子、近江の子だっていうし。」

「それに聞いた話だと、その子今の本妻の子じゃないらしいわよ。」

え？

「そうそう私も聞いた。何でも本妻の人が自分の子を跡継ぎにさせたいためにあの子を追いつき出するようにしたらしいわよ。」

「それだからって何で京介さんなのかしらねー。」

「そうよねー。京介さんは顔も抜群、仕事だってできる、でも最近ではやっぱり子供のことがあるからって交際も全部断ってるんですって。」

「まあ、あの子もかわいそうなんでしょうけどね。」

・・・・・・・・。。

俺は、離れへと向かった。

さっきの気持ちはすべてきれいに消え去っていた。

俺はまっすぐ離れを目指した。

そして離れに戻ると、

「京介さん……。」

力なくそういった。

「ん？どうかしたか倅。」

やばい、泣きそうだ。

でも、はつきりさせないと。

「京介さん、俺が邪魔なら、……もうはつきりそういつていいよ。」

京介は驚いた顔をしている。

「何を……。前にも言っただろ、俺にとって倅は……。」

「もういいんだ！」

そう、この人の優しさにもう甘えてちゃいけないんだ。

「俺、知ってるんだ。俺の母さんは本当の母さんじゃないって。」

「・・・なぜそのことを。」

「そんなことどうだっていいんだ。それで、追い出すために無理やり京介さんに押し付けたって。」

やばい、やっぱり我慢してても涙が出てきた。

「・・・優しい京介さんは、断れなかったんだよね。」

「・・・違う。」

「違うくない、俺のせいで、せつかくの結婚とかも全然できなくなっちゃって。・・・でもね。」

俺は決意を決めて、

「俺、京介さんが本当に好きだから。だからそんな風に京介さんの邪魔になってたくないんだ。」

う、やばい。言うってから涙が本当にあふれてきた。

「・・・さようなら、・・・京介さん。」

そういうと、一目散に離れから出て行った。

京介はそれをすぐに追おうとしたが、

「少し待ちなさい。」

それを止めたのは日奈さんだった。

「止めないでくれ姉さん。」

「いいえ止めます。話は・・・失礼でしたが、大体聞かせてもらいました。今のままあなたが倅君を追えば、きっと二人とも傷ついています。」

「じゃあどうやって。」

「私に任せなさい。それでここに倅君をまた連れてきます。それからはあなた次第です。」

そういうと、

「あなたも少し頭を冷やし、覚悟を決めておきなさい。」

凜と言うと、日奈さんは倅のあとを追った。

「・・・あなた次第なんて、俺の気持ちは決まってる。だが、あいつは・・・。」

日奈が出て行った部屋では一人京介が悩み続けているのだった。

act・14 悲しみからの立ち直り

俺はとりあえず屋敷の庭の隅にヘタツと座り込んだ。

「っ、これでよかったんだ。これで……。」

少し落ち着くとまた涙が止まらなくなる。

いつからこんなに涙腺がゆるくなつたのかな？

そうやって自問してみたら、それは京介と会ってからだった。

「ひっく、京介さん。」

本当は一緒にいたい。

一緒にご飯食べたり、一緒にしゃべったり、一緒に寝たり……。

本当はもっといろんなことを一緒にしたい。

でも、それはだめなんだ。

俺が京介を縛る鎖になってしまう。

そんなのはいやだ。

京介には……あの意地悪だけど本当は優しい京介にはいつも自由でいてもらいたい。

だから、もう・・・さよならなんだ。

そうやって気持ちに踏ん切りをつけようとしてもどうしても涙は止まらない。

むしろさっきより勢いが増すくらいだ。

そうやって連鎖を続けていると、

「こんなところにいましたか。」

誰かの声がした。

声のほうを振り返ると、

「あ、えっと日奈さん？」

やば、泣いてるの見られちゃやばい。

とっさに涙を拭おうとしたら、

「これをお使いなさい。」

そういつてオレンジ色のハンカチを渡された、

「え、でも。」

「気にしないでいいですよ。泣きたいときは思いっきり泣きなさい。」

そういわれても、泣ける所じゃない、

俺は涙を拭くと、

「あの、日奈さん、どうしてここに？」

「失礼でしたが、先ほどの話を聞かせてもらいました。」

ズキッと心が痛んだ。

「それで、倅君はこれからどうするおつもりなんですか？」

「え、これから……。」

そういわれれば、確かに……。

「え」と、とりあえず実家に連絡して寮に入れるようにしてもらえ
るようにします。さすがに追い出した子でも見捨てたりはしないと
思うので……。」

そして、少しでも明るく振舞おうと、

「友達が今相部屋のやつがいなくて言ってたんですよ、だからそ
こに入れてもらえたらな〜って。」

「倅君。」

「は、はい？」

唐突に呼ばれ少し驚いて返事をする、

「あなた、また涙が出ていますよ。」

え？

あれ、何でだろう。

さつき日奈さんに見られないように止めたはずなのに……。

「自分でも気づけないほど苦しいのね。」

「そんな、本当に苦しかったのは京介さんの方で……。」

そう、本当に苦しかったのは京介なんだ。

「倅君。どちらにしてもこのままじゃ、あなたも京介も二人とも大きな傷が残ってしまいます。あなたが戻るにしても戻らないにしても、この話だけは聞いておいてくれるかしら？」

「この話？」

「そう、京介のね。」

俺はこくんとうなずいた。

「京介もね、あなたと同じように、正妻の子ではないの。」

「えー！」

「私とあの子が年が離れているのでも分かるように、正妻はどうしても男の子が産めなかった。でも当時は男の子がどうしても必要だった。そのために、父はある方法を選った。」

「・・・・・・・・。」

「その方法には、母も賛成した。自分のことよりお家のことの方が重要。そう思ったのね。そして・・・・。」

日奈さんは俺のほうを見てゆつくりと

「そのとき産まれたのが京介だった。ただ、産後の状態が悪かったのかあの子の母親は京介に会うことなくこの世を去った。そして数年後、母は玲介を出産した。」

「え、それじゃあ。」

「ええ、でも母は京介も実の子のようにかわいがっていた。そして実力と人格どちらも揃ったとみなしたとき、玲介ではなく、京介に後を継がせることを決めたのよ。」

でもね、と日奈は続けた。

「やっぱりあの子にも負い目があったみたい。家族は何も言わないでも使用人は平気でいろいろ口にする。あの子は実直に周りからの視線をすべて跳ねつけるようにあらゆる面で完璧にすべてをこなした。そして、その結果あの子は他人から何も欲さないようになった。でもね・・・・・・・・。」

日奈さんはそこで俺のほうを見ると、

「あなただけは違った。」

「え？」

「一度近江邸で見た少年が忘れられないってあの子が目を輝かせて
そういった。そして、その子が無理やり養子に出されそうになっ
ていると聞いたなら、すぐに保護しようと動いた。あの子にとって人生
で初めて欲した人、それがあなたなの。」

俺は言葉を失っていた。

「・・・京介さんがそんなに俺を？」

「ええ。」

「・・・俺、それなのに京介さんにあんなことって・・・。」

日奈さんはにっこり笑うと、

「気持ちは落ち着いたかしら？落ち着いたのなら早くあの子のこ
ろに行つてあげて。あなただけが今、あの子の絶望を払ってあげら
れるから。」

俺ははっとした。そして涙を拭って、

「ありがとう日奈さん。」

そういつて走り出したが、すぐに振り返って、

「日奈さん、京介さんの話、教えてくれて本当にありがとう。今度鴻たち連れて遊びに来てよ、お礼がしたいから。」

「ええ、鴻も秀も喜びます。でもね、お礼なんて気にしないでいいのよ。私たちは家族なんだから。」

俺は大きくうなずくと離れへと走っていった。

「京介。あなたは本当にいい子に恵まれてますね。」

日奈がこういったのはすでに倅には聞こえなかったのだった。

a c t・15 両想い（前書き）

文章が恐ろしくまとまりませんでした。

実力不足を痛感する毎日です。

act・15 両想い

こんなに離れまでの距離が遠かったなんて・・・。

俺は急いで駆けていった。

途中何度か人とぶつかりそうになったが、構うもんか。

自分の本当の気持ちに気づいたんだから。

離れにつくと京介は目を閉じてじっと座っていた。

「・・・京介さん。」

京介はゆっくりと目を開け、

「倅・・・。」

そういつて近くまで来て俺を抱きしめた。

「倅、俺はお前が邪魔だなんてそんなことはない、そういつたよな？」

俺はコックリとうなずいた。

「ごめんな、あれは少し間違っているんだ。」

「え？」

「俺にはお前が必要なんだ。だから手放すことなんてできない。」

「俺も・・・」

ここではつきり言うんだ。

「俺も京介さんと一緒にいたい。優しい京介さんと一緒にいたいんだ。」

そういつたら、京介はふいつと横を向き

「・・・優しくなんかない。」

そういつた後俺を見て、

「倅、前にお前を近江邸で見たといったよな？」

俺はコクツとうなづく、

「俺はその時本当に楽しそうに笑っているお前を見た。本当に新鮮だった。昔からいつも周りは俺に本当に笑いかけてはくれないし、俺自身もそう笑ったことはなかった。それでその時どうしても俺にその笑顔を向けさせたかった。もしその時秘書がとめていなかったら、俺は誘拐犯になるところだった。」

そうして一呼吸おいて、

「それから数か月後、お前が俺と似た境遇であることを知って、それで養子に出されそうになっているのを聞いた。その時どうしても俺はお前が欲しくてたまらなくなった。あの笑顔をどうしても俺に

向けてほしかった。俺はお前の言うような優しい奴なんかじゃない。強欲で卑しい奴なんだ。」

俺はそれを全部聞いた後、

「・・・違う。」

とつぶやいた。」

「いいや、これが俺なんだ。」

「違うよ!」

俺は大声で言った。

「もし京介さんがただの強欲な人だったら俺・・・。」

少し、息を整えて、

「・・・俺、京介さんのこと好きになんてならなかったはずだ。」

京介は一瞬驚いていた。

「さっきも言っただろ。俺は京介さんが好きなんだ。親子って強調されるたびに本当は悲しくって仕方なかったんだ。京介さんが俺のこ」と遠ざけてるみたいで・・・。」

そういつたら、京介さんはさっきよりもきつく俺を抱きしめて、

「・・・バカだな倅。」

そういつて、

「そんなこと言われたら余計に放せなくなるだろ。」

そう言つてから

「俺が『親子』を強調してた気も知らず、本当にこいつは……。分かった、教えてやる。俺が強調してた理由はな、お前を襲わないようにするための自粛だったんだよ。」

「え？」

「え、じゃない、今から体に教え込んでやる。」

そういうと、京介は性急に、でも優しく俺の唇を奪った。

俺は少しそれを拒もうと京介の胸を押したがびくともしなかった。

やばい、なんだかぼーっとしてきた。

そして、京介が俺のズボンに手をかけたとき、

「はーい。そこまで。」

後ろで声がした。

京介は俺を抱きしめたまま俺の背後にいる人に少し怒りつつ、

「秀、邪魔をするな。」

そういった。

「別に邪魔するつもりはないんですけど、いいんですかそんな強引で。倅のそういうことに対する気持ちも確かめずに、そんなことから倅を不安にさせるんですよ。」

「……………」

「じゃあ、俺はここら辺で。お邪魔しました。」

秀はさわやかに去って行った。

「…………ごめんな、倅。」

京介はポツリといった。

「最初は笑顔だけでも欲しかった。でも、今はお前が欲しい。だからちよつとしたことでこうなっちまう。倅、俺が怖かったら俺から……………」

そう言われた直後、今度は俺のほうから京介の唇を奪った。

「…………倅？」

「俺だって男なんだからな。」

「？」

「だから、その、確かに今さっきのはいきなりで驚いて少し拒んじ

やったけど。でも、俺だって京介さんが欲しいんだよ。だから・・・」

そついうと京介は下を向いて少し笑いながら、

「ほんと、お前ってやつは・・・。」

とか言いながら笑っていた。

俺は少しむっとして、

「だって京介さんが・・・。」

「京介。」

「え？」

「これから二人だけのときはそう呼んで。」

「え、だけど。」

その直後また唇を奪われた。

しばらくすると、

「好きだよ、倅。恋人同士はこう呼ぶもんだろ？」

俺はかーっと赤くなった。

「さあ、倅。」

「え、あ、きよ、京介。」

夏空の下、晴れて俺たちは結ばれたのだった。

a c t . 1 6 鴻と秀（前書き）

少し閑話休題です。

act・16 鴻と秀

「倅。俺の心の拠り所はお前だけだよ。」

がしつと手を握られた。

どうしてこういう状況になったかというと、

約1時間前。

祖母の招集に従ってみんな一堂に会して食事ってことになったんだけど、その途中のこと。

「鴻。叔父さんのところにおいで？」

「ぎゃー。近づくな、変態。」

鴻はまさに玲介に追いかけていた。

「ねえねえ、京介さん。あれ助けなくていいの？」

「ああ、いつものことだしな。」

いつものことって……。

なんだか鴻が不憫な。（まあ、ある意味玲介もかな？）

「それにな、この後はたいてい……。」

「玲介叔父さん、俺のいない間に面白いことをやってくれてますね。」

お手洗いから戻ってきた秀は部屋へ入るなりそう一言言った。

「あゝ秀。そう思うんなら邪魔しないでくれるか？」

なんだか、嫌な予感……。

「あなたは鴻に嫌われてるんですよ。理解できてないんですか？」

バツサリ言っただけ。

「何言ってるんだ。嫌よ嫌よも好きのうちってな。」

いや、叔父さん、そりゃ無理があるんじゃない……。

そろそろなんだかやばそうなので、俺は京介の服の裾を引っ張って、

「ねえねえ、とめなくていいの？」

と聞いた。

「ん、まあ気にするな。」

まあ気にするなって……。

京介は平然と食事を続けている。

というか、日奈さんもお祖母ちゃんも平然と食事を続けてる。

え、これって俺がおかしいのかな？なんて思っている。

「あー、だから秀、なんでいつもお前は俺の邪魔をすんだよ。」

とうとう玲介は怒り始めた。

「なんでって……。」

そうして秀は平然と、

「鴻をいじめたり泣かせたりしていいのは俺だけですから。」

秀は玲介につこりとほほ笑みかけた直後。

ガツン。

鴻が思いっきり（でも、秀にはほとんど効いてなさそうだけど）秀の頭をひっぱたたいた。

「なんだその理由は。俺はお前のおもちゃじゃねーんだぞ。」

「おもちゃなんて言ってないだろ。鴻は俺のかわいいお兄ちゃんだって……。」

「だー、だからかわいいとか余計だろ。兄だと思っんなら少しは尊敬とか……。」

言った瞬間秀は笑い出していた。

「何がおかしいんだよ!」

「いや、鴻を尊敬ってあんまりにも……。」

そういった瞬間また鴻は秀の頭をひっぱたいて、そのあと俺のほうに来て、

「倅、庭に行こう。」

そういつて俺の腕を引いてすたすた走り出したのだ。

(この時、京介は少し鴻のことをにらんではいたが、とめはしなかった。)

そうして庭につくと、

「あゝ、もう、なんでうちのやつらはこんな変な奴らばっかなんだ。倅もそう思うだろう?」

「うゝん、まあ確かに……。」

「そうだろう、よかったゝ、やっぱり倅は普通だったゝ。」

そういった後

「特に秀だ。あいつ俺のほうが兄だっていうのにかわいいだとか言いやがってゝ。」

「あゝ、確かにその気持ちわかるかも。俺もさゝ、実家に一人弟がいんだけど、そいつも俺のことかわいいかいいうしさゝ。」

なんだから、めちゃくちゃ鴻と話が合って、その後一緒に意気投合しながら話、冒頭の部分に戻る。

「よし、倅、これから昼飯とか一緒に食べようぜ。それで、平和な学校生活を一緒に送ろう。」

「あゝ、俺今、相沢ってやつと一緒に昼飯食べてんだけど、そいつも一緒にいいか？」

「全然オツケー。今度倅から紹介してくれよ。」

「うん、わかった。」

そうして、鴻は

「まったく、秀の奴、性格破綻がなかったら美形だしいいやつなはずなのになゝ……。」

あれ？

鴻？

あ。

「へー、鴻って僕のこと美形って思ってくれてるんだ。」

「げ、秀。なんでここにいるんだよ。」

「なんでって、鴻が大声で倅に庭に行こうって言ったんだろ。だから」

「ら追いかけてきたんじゃないか。」

「なんだって、俺は倅だけに言っただ。そんなの盗み聞きだ。」

「まったく鴻はほんとにバカだな。あれを盗み聞きだっていうなら何を盗み聞きって言わないんだよ。」

「まあ、確かに……。」

「でもクラスから出て昼つてのはいただけないな。僕と一緒にいられないじゃないか。」

「だー。だからそのためだろうが。」

「じゃあ、あの秘密、ばらしちゃおっかな？」

「！」

「え、なにに、秘密って？」

「あのね、鴻はね、昔……。」

「うわー。秀、お前ちょっとこっち来い。」

「そう言っただ秀を引っ張って行ってしまった。」

「行ってしまっ直前。」

「ごめんな。倅。今度絶対そっち行くから、その時はよろしくな。」

そういつて行ってしまった。

「わかっただろ。」

「うわっ。」

後ろからいきなり京介に声をかけられた。

「あの二人はなんだかんだ言っても、いつも仲がいいんだ。」

「まあ確かに……。」

「それより……。」

といい、いきなり唇を奪われた。

「俺を寂しがらせた代償はどうやって払ってくれるんだ？」

「な、京介寂しかったの？」

「当たり前だ。いきなりいなくなったらな。だから……。」

そういつて、俺に顔を近づけ

「絶対にいきなりいなくならないってここで誓ってくれ。」

まったく。

ほんと鴻の言うとおりだな。

「わかった、誓うよ。」

「絶対だからな。」

なんだか、こういう時の京介ってかわいいんだよね。

そうして俺のほうから京介にキスをした。

「うん、絶対だよ。」

庭には涼しい風が吹いていた。

a c t ・ 1 6 鴻と秀（後書き）

閑話休題のつもりが最後で・・・。

やっぱり本編につながってしまうものですね・・・。

act・17 部活and倅の危機

一族集会から帰ってきて2日後の昼休み。

俺とシュンは真中先輩に呼ばれ部室に来ていた。

「全員そろったな。」

「全員というほどの人数でもないがな。」

真中先輩は沖下先輩をちよつとにらんでから、

「みんなよく聞いてくれ。今我が部は非常な危機を迎えている。」

な、入部して早々一体どんな危機が。

と思っていると、

「部員の人数が足りない。」

俺とシュンは一瞬硬直した。

そして、その硬直を破ったのはシュンだった。

「せんぱい、驚かせないでくださいよ。大体前々からのことじゃないっすか。」

「いや、今回はそれだけでなくてな。」

沖下先輩がわざわざ口をはさむとは・・・。

よほど重大なことなのかもしれない。（？真中先輩に失礼。）

「今季から、部員数5人を下回っている部活は、実質廃部なんだ。」

「えー！」

「そう、今年から予算の削減をきっちりするらしくて……。だからこ何とか部員奪取に全力を注いでいたんだが……。」

「よく言う。誘おうとしても、みんなから断られて一人で落ち込んでたくせに。」

「む、うるさいな。お前のほうはどうだったんだよ？」

「俺か？何度も勧誘には行っただが、なぜだか俺が話しかけると皆萎縮してしまってたな。」

要するに、この部活のメンバーはみんな勧誘下手ってことか……。

そんなとき、あろうことかシュンがこんな提案をしゃがった。

「じゃあさ、倅を女装かなんかさせて、それで勧誘したらどうですか？」

「な、何言ってやがんだ、バカ。」

でも先輩方には受けたようで、

「確かに、その方法もありだな。近江は小柄だし、そういうのやつでも違和感はないし、むしろ構いたくて入ってくるやつも多く出てくるだろう。」

「な、俺女装なんかやだぞ。絶対しないからな。」

そういった直後、真中先輩に両手をがしっと握られ、

「近江君。恥をかき捨てて言おう。部活のために死んでくれ。」

いや、死ぬってあんた……。

でもこのままだと本当にやばそうだ。

そう思っでとりあえず。

「だったら俺探してきます。もし入れるにしても、にわか部員よりしっかりした人のほうがいいでしょ？」

「でもな、もうあらかたちゃんとした奴らは部活に入っちゃってるし……。」

う、確かに……。

でもここであきらめたら、女装への道しか残っていない……。

「と、とりあえず待っててください。探してきますから。」

とうとうその場でそう言ってしまったのだった。

そうして、教室へ戻ってきた。

「はゝ、ほんとどうしょ・・・。」

「だから、おとなしく女装すりやすむことじゃん。」

俺はキツとシュンをにらんでやってこういった。

「だったらシュンが女装すりゃいいだろ。」

「冗談。俺なんかがしたらむしろ変な部活って噂が立って、誰も入ってこなくなるだろ。」

「だからってなんで俺が女装なんだよ。」

「なにに、倅が女装すんの？」

げ、声が大きかったのか近くにいたやつらがわらわらと集まってきた。

「な、だから倅が女装さえすれば、部員なんて簡単にゲットだぜ。」

「うゝ、シュンのバカやろゝ。見てろ、絶対に部員を捕まえてきてやるゝ。」

俺は、群がっていたやつらを押しのけてとりあえず教室から退散した。

それにしても、ほんと、どうしよう・・・。

確かにシュンの言うとおり大部分の人間はすでに入部を済ませている。

あと入ってないのは、最初から部活をする気のない奴らがほとんどだ。

途方に暮れて歩いていると、

「あれ、倅じゃん。どうしたんだよふらふらして。」

声のほうを見ると、

「あ、鴻。」

「なんだよ気の抜けた返事だな。どうかしたのか？」

「あゝ、まあ。」

俺はことのあらましを鴻に話した。

「ひつでーな。それで倅が困ってんのか。よし、だったら俺が入ってやる。」

「え？鴻ってまだ部活入ってないのか？」

「ああ、なんだか結構悩んじゃってな。でもこれも何かの縁だし、倅のためだ。」

「へゝ、鴻ってば、陸上部に入んだ。」

「ぎゃゝ、秀なんでいつもお前はいきなり現れんだよ。」

「なんでって、あんまりにも鴻がバカそうな声をあげてたから。」

「う、うるさい。大体俺が陸上部に入っちゃ悪いのかよ。」

「いや、悪くはないんだけど・・・（鴻はかわいいから野放しにする心配なんだよな）」

「なんだよ、いきなり静かになつて。」

「いや、なんでもないよ。あ、そうだ、じゃあ俺もはいればいいんだ。」

「な、お前が。やめろー。せっかく落ち着ける場所ができんのに。」

秀はちよつとムツとして

「へゝ、俺がいたら鴻は嫌なんだ。」

そついうと、途端に秀は悲しげな表情をして

「そうだよね・・・。いつも鴻に迷惑かけてるもんな・・・。」

「え・・・。」

鴻は少しびくつとして、

「そ、そんなことないぜ。まあ、確かに嫌味の率の高いけど迷惑ってことは……。」

「じゃあ、俺が入っても大丈夫だね。」

そういつと秀はこちらを見て、

「じゃあ倅、よろしくね。」

そういつて秀は教室へ引き返していった。

後に残された鴻は小声で「騙された」とつぶやいていた。

とりあえず、当面の危機は去ったかのように思われた。

a c t・17 部活 a n d 倅の危機（後書き）

今更ながら、BLなのにこの登場人物の多さはどうかな、なんて思っている今日この頃です。

a c t . 1 8
一難去つて・・・(前書き)

act・18 一難去つて・・・

「というわけで。」

俺は、秀と鴻をつれて午後、部室に向かった。

「この二人が入部してくれる二人です。」

「ご紹介に預かりました。香芝秀です。よろしくお願いします。」

「それで、俺は兄の（ここ重要）香芝鴻。」

「えゝ、兄ゝ。ちつこいのにゝ?」

あ、シュンいらないことを・・・。

と思つたが、すでに鴻は、

「なんか文句あんのかよゝ。それに、倅のこと女装させようとしてたやつはお前だなゝ。天誅だゝ。」

と言つてシュンにとびかかっていた。

それを少しぼゝと眺めてると突如真中先輩が俺の両手をがしつと握つて、

「近江君。君はなんて素晴らしいんだ。それに入部早々部員同士がこんなに仲良くなれるなんて。」

いや、このやり取りを仲がいいってとれるのはあなたくらいかと・・・。

そうこうしているうちに秀が鴻をシュンから離すためにヒョイッと鴻を持ち上げていた。

「こら、秀、放せ。あいつにはもっと制裁が・・・。」

なんていつているが、すでにシュンはノックアウト状態だった。

「こらこら、もう充分だろ。」

「まだだ、まだ全然足りない。」

「もう。あんまり聞き分けがないと・・・。お仕置きしちゃうぞ?」

「な、ふざけんな。この・・・。」

そういつて鴻は赤くなってうつむいてしまった。

まあ、一段落(?)してから、

「それより部長。2つほど聞きたいことがあるのですが。」

秀はそう質問した。

「もちろん、なんでも聞いてくれ。」

真中先輩は新人部員確保のためか、意気揚々と答えようとしている。

「まず一つ目。現在、陸上部は顧問不在ということですが、今回改新された規約では顧問が必須ということですが。」

「ああ、そのことに関してはもう少し先生たちをあたってみようと思っている。」

「そうですか、それではもう一つ。こちらのほうが重要なのですが・・。」

そういうと、秀は全員を見回して

「皆さん、中間試験は来週からというのは忘れてはいませんか？」

といった。

一同（沖下先輩を除く）はみんな一様に固まってしまっていた。

「ちなみに、赤点をとるようなことがあれば、休部扱いになるので、部員扱いはされません。すなわち・・。」

みんなはゴクツと息をのんだ。

「部員内で赤点者が二人出た時点で、陸上部は解散ということですよ。」

秀は淡々と言った。

部室内を冷ややかな風がサーツと吹いた。

a c t・18 一難去つて・・・（後書き）

最近は学園内のことが多くなつてしまつていて恋愛がどうしても進まないですが、きつと進展させますので気長にお待ちください。

お読みになってくださっている方々には日々感謝の念を忘れず精進いたします。

a c t・19 専属教師（前書き）

現在、交流サイトにて、イラスト募集いたしております。

気になった方がいましたら、どんどん交流サイトのほうに足を運んでみてください。

「は〜。」

家に帰ってからため息が絶えない。

それもこれも、帰ってきてから試験勉強のために問題集を解いているのだが、進み具合が相当に悪いためである。

「おい、倅。帰ってから部屋に引きこもってどうしたんだ？」

「あ、京介。実はね……。」

そして、俺は現在の状況を全部話した。（試験のこととか、赤点とったらダメとか、顧問不在とか）

そう言ったら、

「……お前って頭悪かったんだ。」

って言うって、

「大体、赤点気にする奴なんて内部生単体だろ。」

「う〜、だって……。」

「だって？」

う、実はあんまり言いたくない……。

「どうしたんだ？」

どうやら言うしかなさそうだ。

「あ、あのね。俺ってさ近江の方ではさ、いつつも勉強とか景に見てもらってたんだよね。」

「景に？」

あ、やっぱり京介嫌な顔した。

「景って、お前より年下じゃなかったか？」

う。

「景ってさ、学校の勉強は暇だ、とか言って高校の勉強とかどんな一人で進めちゃってるんだよね。」

なんだか京介の顔がさっきから笑ってない。

「そうか、なら今日から俺が教えてやる。」

「え、京介が？」

「なんだ、不満か？」

いや、不満って・・・。

そうじゃなくって、なんかすごく緊張するっていうか・・・。

「大丈夫だ。俺は大学時代、家庭教師のアルバイトもしてた。」

だ〜から〜、そうじゃなくって〜。

「第一、このままじゃ、お前のノートを見る限り、赤点は免れないからな。」

「あ、これは・・・。」

そう、さっきからずーっと部屋にいて勉強してるくせに、ほとんどまだ白紙の状態なのだ。

「あ、でもさ。いつも京介も夜中勉強してるじゃん？その邪魔になっちゃ悪いしさ。」

「そんなことは気にしないでいい。倅のためなら一週間くらいブラUNKを開けても問題ない。それとも・・・。」

少し、京介は寂しそうな表情になって

「俺と一緒にいやか？」

う、そんな表情されると。

「嫌じゃない。ただ、また京介の邪魔になってるんじゃないかってちよつと心配だったただだよ。」

「邪魔なんてことないっていつも言ってるだろ。それにな、俺は本当だったら、倅に四六時中構ってたいんだ。俺が寂しがりやなの

は知ってるだろう?。」

「いや、寂しがりや、て。」

「だから、こういう時くらいどんどん頼ってこい。」

なんだか、こんな風に言ってもらえると正直うれしい。

「うん、ありがとう京介。」

素直にこういつて笑いかけると、

「・・・かわいい。」

そういつていきなり抱きついてきた。

「な、京介いきなりなんだよ。」

そういつたが、それに対する返答はなく。代わりに

「倅、このまま襲ってもいいか?。」

とか、聞いてきやがった。

「バカ、試験がやばいんだよ。」

「そうか、だったら試験が終わったとき、覚悟しとけよ。」

え?

なんか、俺、今猛烈に墓穴掘った気が？

そうして、俺の専属教師による特訓（？）が始まった。

act・20 一緒の時間

そのあと、俺は結局京介の部屋で勉強することになった。

俺がどうしても自分の部屋がいいってこねても、

「自分の部屋だと周りに誘惑物が多すぎて集中できないだろ。」

と言われてしまった。

うー、京介の部屋で二人つきりで勉強するほうが緊張して集中できないよ、とは結局言えず現在京介の部屋の前で勉強道具を持って突っ立てる。

さあ、深呼吸して入ろうと思った瞬間、

「何部屋の前で突っ立ってるんだ？さっさと入れよ。」

「わー、なんで扉閉まってんのにわかんのか？京介ってエスパー？」

って言っただけ扉をあけたら少し笑われて、

「・・・愛の力じゃないか？」

なんて言いやがった。

俺は赤くなりながら、

「つたく、子供だと思ってからかいやがって。」

って言ったら、

「ほー、子ども扱いはいやか。」

なんていつて俺の手に持っていた勉強道具を素早く机の上に置き、俺をヒョイっと持ち上げてベットのほうに投げた。

「な、何すんだよ。」

「いや、子ども扱いはいやだっていうからな。」

そういつて、いきなりのしかかってきた。

「・・・倅。」

そして、いつもとは違って色気たつぷりのボイスでささやいてきた。

や、やばい。この声だけでもう心臓のドキドキが止まんないよー。

俺がドキドキして目を閉じて、ぶるぶる震えていると、

「冗談だよ倅。」

そういつて、離れてしまった。

なんだかちょっと物足りない、って俺何考えてんだー。

一人であわあわしてると、

「それに、試験が終わったら相手してくれんだろ？」

「あ、それは……。」

「じゃあ、それまでは待ってるよ。」

そして、耳元で、

「倅に嫌われたくないもんな。」

とささやかれた。

「な、嫌いになるなんて……。」

「そうか？もし俺が野獣のようにお前が嫌がるのも無視して襲い掛かってるか？」

「えー、京介ってそんな願望あるの？」

そう言ったら、にやーっと笑われて、

「そうだったらどうする？」

なんて聞かれた。

俺が返答に困つてると、

「大丈夫だよ。俺は倅を傷つけるようなことはしない。」

そういつて俺の髪をなでながら、

「俺が欲しいのは倅の身体より、むしろ心の方だから。」

なんていつてきた。

「・・・っ。なんだよ、もう。」

「・・・倅？」

「もう心の方はとっくに奪われてんだよ。」

俺は赤くなりながらも、何とか言い切った。

その瞬間京介は俺をぎゅーっと抱きしめて、

「・・・ほんと、なんでお前は、こんなに俺のこと煽るようなこと・
・・。いいか試験が終わったときは覚悟しとけよ。もう今だって、
何とか自制してんだからな。」

「・・・わかったよ。」

そして俺は、京介を抱きしめ返した。

そして、現実に戻り、俺は京介に専属で勉強を教えてもらった。

a c t ・ 2 1 鴻の願い（前書き）

皆さん、大変長らくお待たせしました。

長部、復活（？）いたしました。

これからは、またコンスタントな更新を続けていこうと思っています。

ところで、私は最近自分の小説の中で一番、鴻に思い入れが出てきました。

皆さんにも思い入れのキャラができていたらいいな、と思うこの頃です。

もし、ありましたらどんな感想にお書きください。

皆さんのご意見で、そのキャラのお話を書いていけるかもしれません。

「倅、秀のヤツ何とかしてくれよ。」

悲痛な叫びで鴻がこういったのは、俺が京介から勉強を習い始めてから3日目の昼休み。

4時限目終了のチャイムと同時に鴻は教室に入ってきて、

「倅、部室で昼飯一緒に食べよーぜ。」

そついうなり、俺の手を引っ張って部室へ直行して今に至る。

「毎日毎日、勉強だ、勉強だ、俺を机まで引っ張っていくんだぜ。もし俺がなんか反抗しようものなら、『それじゃあ、鴻はみんなに迷惑をかけたんだね。』だってよ。そんなこと言われたら、こっちは何もいえねーっての。」

「あー、確かにその気持ちはちよつとわかるかも。」

そつ、あれからの京介はまさにスパルタだった。

休憩時間以外はきっちり俺の勉強を見て、同じような間違いをすると、かなり怒られ、そしてまた細かく説明された。

でもさ、なんだか本当に俺のこと考えてくれてるんだな、って思うと、途端にドキドキしてきちゃったりして。まあ、京介には言えなけれど……。

「え？倅も誰かに習ってんのか？」

「あ、うん。京介さんに……。」

「京介さんが！」

だいぶびつくりされたな。

「うん、そうだけど。」

「へ、ちよつと意外だな。」

「そう？」

「うん、だってさ、昔は会合とかであっても、ほんと挨拶も儀礼的なもんだけだったしさ。結構固い人なのかな」って思ってたんだよ。」

「へ。」

「それよりさ。今日はお願いがあるんだ。」

そついうと、鴻はいやに真剣な目つきになった。

「ど、どうしたんだよ。いきなり。」

そんな間も、鴻は俺にじりじりと近寄ってきた。

でも、真剣なまなざしでも、どうしてもそれが全部かわいさに移っ

てしまうのが鴻だった。

「実はさ、今晚泊めて欲しいんだ。」

「へ？」

「というか、勉強を教えてくれ。」

「大丈夫だけど、秀が教えてくれてるんじゃない……。」

「だーからー。あいつに教えてもらってたら、神経すりへってぶっ倒れちゃうよ。本当は母さんも父さんも倅を家に連れてこいーつて言うんだけどさ。今は生徒会の仕事もないせいかな、あの悪鬼が……。」

そういった直後、部室の窓が開き、

「だ〜れ〜が〜、悪鬼だつて〜。」

まさしく、悪鬼のように秀は登場を果たした。

「ぎゃ〜、秀〜。いつからそこにいるんだよ〜。」

「う〜ん。結構前から。」

「ストーカーだ。訴えてやる。」

「バカだな〜鴻は。兄を心配に思う弟の健気な行動がストーカーになると思ってるの？」

「どこが健気な弟だよ。いつつも突然現れやがって。」

まだ少し涙目（相当驚いていたらしい）の鴻は目をつるつるさせながらそういった。

実は、正直俺も相当びっくりしたんだけど・・・。

「それにしても、面白そうなこと話してるね。せっかくだから俺も混ぜてもらおうかな？」

「だー。絶対だめだー。お前から離れるために倅にお願いしてんの、お前がいたら何にも意味がないだろー。」

「へー。鴻はそういうこと言っただー。」

はた目から見て、鴻はギクツとしていた。

「いつつも毎晩毎晩自分の時間を割いて教えてあげてるのになー。」

「な、た、確かに勉強は教えてもらってるけどなー。お前っていつつも終わった後に・・・。」

そこで、鴻は、はっとして俺を見て、

「倅、今のはなんでもないんだ。忘れてくれ。」

って、必死な顔で言われた。

「まあでも、鴻が嫌だっというんならしょうがないか。」

「え？」

「俺も、鴻には嫌われたくないからな。そんなにいやだっていうんなら、一人で行けばいいよ。」

あ、秀……。

これって、前にもあったような……

「あ、いやってわけじゃないんだけどさ。でも秀だったたまには一人で勉強したいかなってさ。」

そついうと、秀はにっこり笑って、

「全然。俺は鴻と一緒にいられる方が断然いいよ。」

そついうと、秀は鴻を抱きしめていた。

「な、離せよ。こら。」

なんていっても、さっき突き放されたときとは違って、鴻は少しうれしそうな表情をしていた。

なんだかんだ言っても、この二人、仲いいんだよね。

そつ思っていると、秀はこっちを見て。

「それじゃあ、俺も行っても大丈夫かな？」

まあ、二人と一緒にって、結構楽しそうかも。

そう思って、俺は、

「ああ、大丈夫だよ。」

そういつて応答した。

a c t ・ 2 1 鴻の願い（後書き）

次回はお泊り会です。

秀と鴻のお話も番外でちょっと書こうと思っています。
本当に、作者自身、鴻に思い入れがあるんです。

そのあと、俺は京介に連絡を取って、二人が今日うちに勉強しにくる旨を伝えたんだけど、京介はなんだか嫌がっていた。

でも、俺がどうしてもお願いってごねたら、何とか承諾をもらえた。

そして、現在玄関の前。

「へー、ここが京介さんの家か。」

「へーって、二人とも来たことないの？」

「ああ、ここに来るのは初めてだぜ。」

「京介さんは日頃から忙しそうに働いていられるから遊びに来るとか昔からなかったんだよ。」

「あー、そっか。」

そして、鍵を開けようとしたら、ドアが突然あいた。

「うわ、京介・・・さん。帰ってきてたの？」

やばいやばい、驚いていつもの呼び方が出ちゃった。

一応、俺と京介の関係はヒミツなんだよ。

まあ、秀にはばれちゃってるみたいだけど……。

「ああ、今日は仕事が早く終わったからさっき電話もらった時にはもう家にいたんだ……。」

あ、なんだか京介、「だから、今日は長く一緒にいられたのに。」
って感じの表情してる。

そっか、だからさっきちょっと渋ってたんだ。

「こんにちは京介さん。こちらつまらないものですが。」

「あ、秀。お前いつの間にそんなもの。」

「鴻みたいなおバカさんと違って、俺は行動に抜かりがないんだよ。」

「なー、今からどっか行つてなんか買ってくる。」

そういつて飛び出そうとした鴻に、

「あー、別にそういうのはいいぞ。日奈姉さんには前にいろいろお世話になったしな。」

あ、それって。

「それより、二人は家には連絡は入れたのか？」

「はい、父も母もくれぐれも京介さんや倅に迷惑をかけないように、
と言っていました。」

「あと、父さんが京介さんによろしくって伝えてくれってさ。」

鴻と秀のお父さん……。

俺は会ったことないけど、京介が言うに、鴻にめちゃくちゃ似ているらしい。

だから、玲介叔父さんが相当なついていたらしいけど……。

「ああ、それなら大丈夫か。」

「鴻も秀も上がって上がって。」

「じゃあ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

そういつて、二人は京介の家に入った。

今日一日。楽しそうな気がしてたまらない。

a c t ・ 2 3 お泊り会？（前書き）

前話があまりにも短かったせいで、友人から非難を浴びてしまいました。

皆さんにもこの場をお借りして謝罪させていただきます。

act・23 お泊り会？

「さあ、それじゃあ勉強始めるか。」

「え？」

部屋に入ってから、俺と鴻は一旦休む気満々だったため、秀のこの一言に思わず驚いてしまった。

「何が、『え？』だよ。俺たちは勉強しに来たんだろ？」

「あゝ、そうだけどさ。秀、ちょっと休んでからでも・・・。」

「だゝめ。鴻はもう休んでる暇なんてないでしょ。」

「うゝ。」

「鴻ってそんなにヤバいの？」

「うん、中学時代にもよく呼び出し食らってたよ。」

「な、そのことは言うなよ。」

「ちゃんとやればできるのに、いつつもサボってるからな、鴻は。」

「うゝ、うるさいなー。」

あれ、なんだかんだ言っても秀も鴻を完全にバカにしてるわけじゃないんだ。

それがわかってちよつと俺がにこにこしてると、

「なんだよ倅。倅だってどうなんだよ？」

「え？」

「こいつも鴻と遜色はない。」

「な、京介・・・」

「な。んだ。倅、やっぱ一緒に頑張ろうぜ。」

「だが、今は俺が教えてるからな。だいぶいい線には来ている。」

「げ、なんだよそれ。」

「鴻は俺が教えてあげてんのにまだに基礎がわかってないもんな。」

「な、だからそういうこと言っただけ。」

そうして、俺たちはリビングで（さすがに四人で京介の部屋は狭いというか、暑苦しい）勉強を開始した。

基本的に、京介が俺を、秀が鴻を教えるって形にはなってたけど、京介は秀にも鴻にもしっかり教えてあげていた。

なんだかんだ言っても、やっぱり京介ってすごいよね。

なんて感心すると同時にちょっと憧れちゃったんだ。

だってさ、なんだかっこいいじゃん。

平等に教えてあげられるってさ。

でも、そうやって思った時、ちょっと胸がちくつとした。

平等・・・って何考えてんだろ。

気を取り直して数学の問題をガシガシ解いていく。

一段落を迎えたとき。

「鴻と秀、風呂が沸いたからお前たち先に入ってこい。」

京介がそういった。

「ああ、俺たちは後でいいですよ。お世話になってるのに先は悪いですから。」

「じゃさ。」

そついうと、鴻は俺に背中にのしかかって（といっても鴻は小柄なのでじゃれてる感じ）、

「倅、俺と一緒に入ろっぜ。」

こうだった。

直後、ほんの一瞬京介の表情が曇った気がした。

「それでさ、ちょっとお願いがあんだけど、寝巻貸してくんないかな？」

「ああ、別にいいよ。取ってくるから、先に入ってて。」

「OK。じゃあ先に行ってるな。」

そういつて、鴻は風呂場に走って行った。

俺も部屋に寝巻を取りに行くためリビングを出ようとしたとき、

「別にあの二人なら一緒に入らせても大丈夫ですよ。」

そう京介に言う秀の声が微かに聞こえた。

そのあと、俺は寝巻をとって、風呂場に向かった。

「湯加減はどうだ？」

「うん。大丈夫だよ。」

そうして俺も風呂場に入ると、鴻はふにやうと湯船に浸かっていた。

「鴻って風呂ではいつもこんな感じなのか？」

「うん。なんだか気持ちいいところなっちゃうんだよね。」

そうして、またふにゃ〜っとしていた。

そして、俺が頭を洗っていると、

「それにしても、京介さんってこんなに面倒見がよかったんだね。」

「

と言ってきたので、俺は頭を洗い流し、少しふるふると頭を揺らして水を飛ばして、

「いっつもあんな感じだけだな。」

「そっか？それより、倅、なんか今の犬みたい。」

「あゝ、それ、前に弟にも言われたんだよね。」

どうしても、頭をふるふるして、水を切らないと気持ちが治まらないっていうか……。

もしかしたら俺の前世って犬？

「でもさゝ、秀って本当に頭いいんだね。」

ほんとに今日だってほとんど鴻に教えてたし、京介に聞いてた部分だって相当高度な部分だった。

「あゝ、あいつはさ昔っからああなんだよ。でもさ、あれで小学校低学年のころは虚弱体質だったんだぜ。」

「え、それ本当？」

「ああ、だからさ、昔はよく俺が守ってやってたんだよ。でさ、勉強はあいつに教えてもらってさ、そんな感じだったんだよ。」

あれ、なんだかちょっと鴻が悲しそうな気がする。

「昔はよかったんだよ。俺は勉強は教えてもらってたけどさ、悪い奴とかからは俺が守ってやってたんだ、でも今はさ……。」

「……鴻？」

そこで鴻は、はつとして、

「悪い悪い、なんでもないんだ。とりあえずあいつはいつつもあんなんだよ。」

「ふん。」

もしかしたらさ、鴻がいつつも秀に突っかかっているのって……。

でも、なんだか鴻と秀は本当の意味で仲がいいんだなって再認識できた。

「それより次は俺が頭洗う番。」

そういつて鴻が湯船から出てきて、入れ替わりに俺は湯船に入った。そのあとワイワイ騒いでいたら、京介につるさいって怒られて、

風呂から出た。

a c t ・ 2 4 お泊り会？（前書き）

いよいよネタが尽きてきました・・・。

どなたかいい案があればHELP。

act・24 お泊り会？

風呂から上がって、そのあとはまたひとしきり勉強をした。

そうして時間は過ぎていき、

「あ、やば、もうこんな時間じゃん。」

時計に目をやると、すでに二時を指していた。

「じゃあ、そろそろ終わりにして寝るか。」

秀がそう言ったら、鴻はいきなり俺の背中から抱きついてきて、

「倅、一緒に寝ようぜ。」

と言ってきた。

あ、また京介が睨んでる。

もう、別に鴻には他意はないんだから。

そうしたら、

「それじゃあ、俺も一緒させてもらおうかな。」

そう秀が言った。

そしたら益々京介の表情は怖くなって、今にも、「だったら俺も一緒に……。」って言わんばかりだ。

でも、京介がそういう前に鴻は言った。

「えゝ、なんで秀も一緒なんだよ。」

「へゝ、じゃあ、お兄ちゃんの鴻はかわいい弟に寂しく一人で寝ろっというんだゝ。」

「うゝ、そんなデカい図体してそんなこと言っただってなゝ……。」

そうしたら、突然秀は鴻を抱き寄せて、

「俺、鴻と一緒にじゃなきゃ寂しいんだよ。だから一緒にでもいいだろ？」

なんて、甘くささやいていた。

そしたら鴻は赤くなりながら、

「だゝ、わかったよ。分かったから、さっさと放せゝ。」

そっいいながら、秀の胸の中でじたばたし始めた。

「まあ、そういうわけだから、倅、よろしくね。」

「あゝ、了解ゝ。」

とは言ったものの、京介が依然として怖い顔をしているのでどうし

ようかな〜って感じた。

「とりあえず、俺の部屋に布団敷くから、二人とも手伝って。」

「OK。」

「ちょっと待て。」

そこでとうとう京介が口をはさんだ。

「秀だけは、ここに残れ、少し話がある。」

「はい、わかりました。」

「じゃあ、倅、さっさと行こうぜ。」

そっいつて鴻は俺の背中を押した。

ちょっと、京介たちの話が気になるけど、まあいいか。

そのあと、俺と鴻は部屋に布団を敷いて、歯を磨いて、寝床に転がり込んだ。

「なんかさ〜、合宿みたいで楽しいよな〜。」

「うん、でもまあ試験って難題はあるけどね〜。」

「まあ、そうだな〜。でもさ、今度は倅もうちに遊びに来いよ。母さんも父さんも楽しみにしてっからさ。」

「うん、絶対行くよ。」

そうこうしてたら、秀が部屋に入ってきた。

「秀、京介さんの話なんだったんだ。」

「ああ、別に大したことじゃないよ。」

そういわれると、滅茶苦茶気になるっていうか……。

「あれ、布団は一組でよかったのに。せっかく鴻と一緒に寝られるかなって期待してたのに。」

「あゝ、こんな夏の前に一緒なんて暑苦しくて寝てられるか。ほんと、お前は何考えてんだかわかんねーな。」

「何って、そりゃ鴻のことを四六時中考えてんだよ。」

そういった直後、鴻は布団をかぶり、

「まったく、付き合ってらんねー。俺はもう寝る。」

そういつて、本当にあつという間に鴻はすやすやと寝息を立て始めてしまった。

「あらら、いまだにこんな早く寝られるんだね。」

そういつて秀は鴻の髪をなでていた。

その姿が本当に鴻が愛しいって感じでちょっとこの場にいがたい感

覚になった。

でも気を取り直して、

「あのさ、秀。さっき京介さんが話してたことって……。」

そういうと、秀はこっちを向いて、

「ああ、鴻にはああいったけど、もちろん倅のことだよ。」

「えっと、なんて？」

「うん、倅に手を出したら、明日の朝日は拝めないと思えて。」

秀はにつこり笑いながらそういったけど、俺は笑えない。

なぜなら、京介なら、本当にやりかねないから。

「まあ、俺も命が惜しいし、倅は心配せずに寝ていいよ。」

「あ、あのさ。」

ここで、俺はちょっと気になっていたことを聞くことにした。

「秀が昔は虚弱体質だったって……。」

「ああ、鴻から聞いたの？うん、本当だよ。」

「え、でも今は。」

「うん、もう全然大丈夫。むしろ、あの当時に少し感謝してるくらい。」

え？それはどういって感じの顔をしてたら、

「鴻が俺から離れられない要因が作れたから。」

そういった秀の顔は少しさみしそうだった。

「鴻はそれがなかったら、きっと俺からはすぐに離れて行ってしまう。そうやって縛っていきやいけないんだ……。」

なんだか、本当に落ち込んでいる。

いつも自信満々な秀がこんな表情を見せると、なんだか俺も不安になる。

「……大丈夫だよ。」

「……倅？」

俺は、とっさにそういていた。

言わなきゃいけない気がしたんだ。

「だってさ、なんだかんだ言ってたって、絶対鴻は秀のことを見ている。たとえ、そんな風な縛りとかがなくなっても、絶対鴻は離れていかないんじゃないかな。だって風呂でだって、鴻は途中から秀の話ばっかだったし……。」

そう言ったら、秀は表情が変わって、

「倅って案外鴻に似てるかもね。」

なんて言ってきた。

「ああ、まあ体格とか似通ってはいると思っけど。」

「そうじゃなくって、性格的なところとか。」

うーん、と秀は悩んでから、

「お人よし。」

といった。

「だ、誰が、お人よしだよ。」

思わず大声を出してしまって、秀にシーっと言われてしまった。

まあ、幸いにも、鴻はぐっすり眠ってて起きなかったけど（とゆーか、ほんと子供みたい）

「でもさ、京介さんが惚れた理由がわかった気がする。」

「え。」

「もし、鴻が俺のこと相手してくれなくなったら、京介さんから倅を奪うってのもありだな。」

「な、俺は京介だけの・・・。」

そういつて、俺が固まっていると、秀は俺の頭をなでて、

「冗談だよ。」

と言ってきた。

「それにしても、倅も京介さんにベタ惚れとは。」

「な、はめやがったな。」

「ほぐら、やつぱり鴻に似てる。」

「う。」

「大丈夫。俺に、京介さんと倅の間を邪魔するような気持ちはないから。それに俺も鴻だけで手一杯。」

手一杯なんて言いながら鴻の方を見る秀は本当に優しそうだった。

結局、そのあとはいつの間にか寝ちゃったらしくて、どうも記憶が定かじゃないんだけど、もう秀はさっきみたいな悲しそうな表情を見せなかったってことだけは覚えてる。

それから数日後。

無事に試験をすべて終了し、部員メンバーには幸い赤点者が出なかった。

そして、今日はこれからのことについて簡単なミーティングをする
と、沖下先輩に言われて部室へ向かっていると。

「それにしても、ほんつと助かった。」

「ほんと、これで赤点なんてとったら秀のヤツに殺されるどころじ
やすまなかったからな。」

「そういえば、秀は今日はこれないんだって？」

「うん、あいつ生徒会のほうが忙しいらしくってさ。」

「あゝ、そっか。それにシュンのやつも今日はなんか忙しいからっ
て来ないんだよ。」

「あんな奴はどうだっていいよ。」

そう、あの最初以来、鴻は完全にシュンを嫌ってしまった。

まあ、悪い奴じゃあないんだけどって言っても、女装させようっ
て発想をしたことをどうしても許せないみたいで……。

でも、まあ一緒に部活やってくんだし、これから仲良くなっていくかもな、なんて楽観的に俺は考えてる。

「それよりさ、今日は顧問が来るんだろ。どんな人かな？」

「さー、俺もまったく教えてもらってないからな。」

そう、さっき沖下先輩が俺たちを呼びに来たとき、去り際に顧問が来るってことをボソツと言ってたんだ。

「いい人だといいよな。」ってあれ？」

そういうと鴻は立ち止まって部室の方を眺めていた。

「ん？どうかしたの？」

「いや、あれってさ。」

俺も指さす方を見ると、

「あ、京介さん。」

そう呼ぶと、京介はこっちを見て、

「倅と鴻か、遅いぞ。」

「遅いぞって、なんでこんなところに京介さんがいるんだよ。」

そのあと言った言葉に、俺と鴻はしばし呆然とさせられることにな

る。

「ああ、今日から陸上部の顧問としてやっていくことになった。よろしくな。」

ときは変わって、部室の中。

秀とシュンを除く四人と京介は部室の中に集まった。

そして、真中先輩がびくびくしながら紹介をした。

「あゝ、今日から我が部の顧問として来ていただく、高鳥京介さんです。」

その直後、鴻がはいつと手をあげて、

「あの、理事とかでも顧問ってやっていいんですか？」

聞いた（真中先輩はその間おろおろしてた。）

「ああ、別に学校の規約には反していない。さっき秀にも言っていた。」

まゝそうわれちゃあ真中先輩もどうしようもなかったんだろうな・
・。

「それで、俺は仕事も兼任してるので、あまり部活には顔を出せないかもしれない。だから、基本的には今までと同じように真中が部を仕切る。それでいいな？」

「は、はい。もちろんです。」

あゝあ、相当怯えさせちゃってるよ。

そりゃそうか、だって一応理事だもんね。

そして、そのあと合宿のこととか、これからの練習内容とか、大会のこととか話してそのあとはお開きになった。

ミーティング終了後、鴻は秀から呼び出されたらしくってそのまま学校の方に向かい、真中先輩は憔悴しきっていたため、沖下先輩が介護しながら帰って行った。

そして、俺と京介は一緒に帰った。

帰り道の途中。

「なんでいきなり顧問なんてやるんだよ。」

そう言ったら、京介は俺のことをじっと見つめてきた。

「・・・倅のことが心配なんだ。」

「へ？」

「前に、女装させられそうだったって聞いたから。」

「げ、それを誰に？」

って一人しかいないか。

「そんなことはどうだっていい。」

そついうと、京介は俺を抱きすくめると、

「俺以外のやつに、倅を好き勝手させるなんて、絶対許さない。」

な、そんな恥ずかしいこと、道の真ん中で言うなよな。

俺は、赤くなって目を閉じてると、

「倅、覚えてるか約束。」

「や、約束？」

京介は、俺の耳元に口を当てると、

「試験が終わったら……。」

あ。

「だから、早く帰ろう。」

俺は、さらに真っ赤になりながら京介に引っ張られていった。

だって、約束の内容を思い出してしまったから。

a c t ・ 2 6 本当の恋（前書き）

まず初めに、このように更新が遅くなったこと、非常に申し訳ありませんでした。

今回は18禁に引つかからないように話を作っていたため、非常に時間がかかってしまいました。

これからも、この話は続けていくので、どうか応援お願いいたします。

家に帰りつくと、京介は俺の手を引いて、京介の部屋に入った。

いつも入ってる部屋なのに、今日はなんだかどうしても意識してしまふ。

すごいドキドキしてるのに、なぜか、京介の横顔がどうしても焦ってるように見えてしまった。

その焦ってる表情を見た瞬間、俺はどうしてか、何ともやるせない感情に陥った。

そして、同時にこのような行為にこのまま流されてしまってもいいのか、という疑問がふと浮かんできた。

そんな俺の感情には気づかずに、京介は俺をベッドの方に押し倒してきた。

そして、有無を言わずに口を重ねてきた。

「…………ん。」

そして、京介の手が俺のズボンにかかった。

その時、俺は、どうしても耐えられなくなって、京介の胸を押した。

京介はそのことにとっても驚いたようで、

「倅？」

と、声をかけてくる。

その次の瞬間。

ピンポン。

インターフォンが鳴った。

京介は無視しようとしたが、その後も何度も何度も鳴るために、仕方なく、玄関へと向かった。

そうして、俺は、一度立ち上がったから、またポフッとベットに横になった。

あの時、咄嗟だったけど、頭の中はいやにクリアーだった。

京介とそういうことをやるのが嫌なんじゃない。

確かに、少し怖いとか、痛かったらどうしよう、とかはある。

でも、京介のことは好きだし、そういうのは拒絶する理由なんかじゃないと思う。

大事なのは、京介が確かに焦っていたことだ。

その理由はわからないけど、俺は、もし京介とそういうことをするなら……。

と、その時、突然ドアが開いた。

そこにいたのは、

「景!？」

そして、景はすぐに俺に近づいてくると、力いっぱい抱きしめてきた。

「ごめん、兄さん。事情は全部母さんから聞き出した。」

あ……。

その後、落ち着いた表情で京介が入ってきた。

「兄さんがそんなことに巻き込まれてたつてのに、僕は何もできていなかった。本当にごめん、兄さん。」

「……景。」

景は少し泣いてるみたいだった。

それだけ心配してくれてたつてことだよな……。

「それでね、兄さん。」

景はしっかりと俺を見ると、

「父さんも説得した。もう、兄さんがあそこに戻れない理由はない。

これからは、絶対に僕が兄さんを守る。だから、兄さん、一緒に帰ろう。」

え……。

それじゃあ。

俺は京介の方を見た。

京介はいつも通り、冷静な表情だった。

いや、普通に見たらそうかもしれないけど、一瞬だけ、悲しそうな表情が見えた。

気のせいかもしれないけど、俺には確かに見えた気がしたんだ。

「……景。」

俺は決意した。

「俺は、帰れない。」

「どうして!?!」

俺は、一呼吸おいてから、

「俺、京介と一緒にいたいから!」

そう、言い切った。

景はそのことに少し呆然としていたが、直後、京介の方をキツと睨み付け、ツカツカと京介の方に向かっていった。

その時、

「な、京介兄、鍵空いてたから、勝手に入ってきちゃったぞ。」

そういつて、玲介が顔を出した。

その瞬間、京介の目がキラリと光って、

「ちょうどいい、玲介、こいつを連れてけ。」

「は？なんでそんなこと。それにこいつは俺のタイプじゃ……。」

「住居不法侵入。」

「は？」

「だから、こいつを連れてったら、チャラにしてやる。」

「おいおい、かわいい弟にそんな無粋な真似を……。」「

でも、京介の目は一切笑っていなかった。

さすがに、玲介も自分の危険性を認識したのか、景を捕まえて肩に担いだ（玲介は軽く190cmを超える巨漢）

「これで、無かったことにしろよ。」

「ああ、わかったよ。」

その間も景は「放せ〜」とか言っていたが、有無を言わず連れて行かれてしまった。

部屋には、また二人だけが残された。

「倅……。」

京介は俺の頭に手を乗せようとしたが、直前で手をひっこめ、俺の隣に座った。

そのまま、沈黙の時間が流れる。

でもこのままじゃいけない。

そう思って、意を決して聞いてみた。

「ねえ、京介。なんで、さっきあんなに余裕のない顔してたの？」

「……………心配だった。」

だいぶ時間を空けてから、京介はボソツと言った。

「お前が、学校で女装とかさせられそうだったと聞いて、誰かに奪われると思った。それで、少しでも早く、俺のものにしてしまいたかった。」

京介はゆっくりこちらを向いた。

「そんな焦った気持ちがお前を怖がらせてしまったんだよな。」

違う。そうじゃないんだ。

それを伝えるために、俺は京介の頬をつかみ、自分から京介にキスをした。

京介はとても驚いていた。

「確かに、あの時の京介は怖かった。でも、そんなことより、京介とのせつかくの思い出が、あんな焦った気持ちで壊されることの方がもっと怖かったんだ。」

俺は、今ある気持ちすべてを話した。

でも、言った瞬間、どうしても恥ずかしくなって、京介が正視できなくなって、俺は思わずソッポを向いた。

と、その時隣でクスッと笑う声が。

「なんだよ、人が真剣に言ったのに。」

「いや、悪い。そうだな、本当に倅の言うとおりだ。」

そこで、京介はまた真剣な眼差しになった。

「でもな、いつも心配してるんだ。お前が俺の前からいなくなってしまうんじゃないかって。」

「俺だって心配だよ。京介、かつこいいし、前にはお見合い写真だ

って机に置いてあつたし、でもね……。」

俺は一回そこで言葉を切ってから、しっかりと京介の目を見据えて、
「それでも、京介のことが一番好きだから。この気持ちだけは本物だから。」

俺は、そういった。

「倅……。」

そして、

「俺は独占欲が非常に強いぞ。それでもいいのか？」

「そんなの、前から知ってることじゃん。」

「……そうだったな。」

やっと京介が笑った。

そう、俺はこの京介の笑顔が見たかったんだ。

a c t ・ 2 7 翌日の朝（前書き）

更新が不定期になってること、本当に申し訳ありません。

それだけに、一話一話、力を込めて執筆しております。

何とか更新ペースを上げていきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

感想もいただければうれしい限りです。

「……ん、ふあゝ。あれ？」

なんだかいつもの目覚めと違う感じ……。

（あ、ここって京介の部屋じゃん。というか、どうしてここで寝てるんだろっ？）

そこまで思考が回ったところで、突然に大体のことを思い出した。ただし肝心なところを抜いて。

「う、うわゝ。も、もしかして、俺、京介と……。」

そこに関してだけはどうしても思い出せない。

とにかく、覚えてるのは京介の笑顔を見たあたりでほっとしたところまで。

一人で部屋の中であたふたしていると、

「朝から騒がしいぞ。」

そういつて、京介が部屋の中に入ってきた。

「あ、京介！」

俺は間髪入れずに聞いた。

「あ、あのさ、昨日もしかして……。」

そういうと、京介は少し不機嫌そうな顔をした。

「まったく、朝までぐっすり眠ってたやつはどこのだか。」

「え？あ、ああ。」

そこまで言われて、大体分かった。

「もしかして、俺って、京介の笑顔を見た後すぐに寝ちゃったの？」

そう言ったら、京介は俺の頭をワシッと掴んだ。

「『寝ちやったの？』じゃない。そのおかげで俺はお前の寝顔を見ながら鬱々としてたんだぞ。」

ああ、それで朝から不機嫌だったのね。

「第一、そういうことがあったらもつと服装が乱れてるか、裸でベツトで寝てるか、そんなもんだろ。」

「で、でもさ、京介、どうして俺を起こそうとしなかったの？」

「お前は、前日に言ったことも忘れたのか？」

や、やばい、なんだかさっきより不機嫌になってく……って、え？

「前日って?」

そこで京介は盛大にため息をついた。

「最初の思い出はちゃんとしたものにしたいって言ってただろう。無理やり起こして続けて、最悪だったなんて言われたら、こっちも最悪だからな。」

そういうと、京介はぶいっとそっぽを向いてしまった。

あ、なんだかかわいい。

なぐんで、少し思ってたクスッと笑ったら

「何がおかしい?」

やばい、さらに加熱した。

このままじゃ、朝から狩られる。

「いや、あのさ、ほんとごめんって。」

俺は誠意をこめて謝った。

でも、京介の怒りはそんなことじゃ消えなかったようだ。

「それじゃあ、倅は何をして償ってくれるんだ?」

「へ?」

「もちろん俺を一夜悶々とさせた代償として、何かしてくれるんだろ？」

そういつて、京介はベットに寝ている俺にのしかかってきた。

や、やばい。ほんとに朝から狩られる。

何とかそれを阻止しようとするが、体格の違いか、まったく京介の体を押しのけることができそうにない。

「なんだ？怖いのか？」

京介は余裕綽々の顔でそういつた。

「な、そんなわけないだろ。」

「ふゝん、それじゃあ、この手は？」

俺が京介を押しのけようとして出した手を指してそういつた。

「あ、これは、その、重いからさ。」

「ふゝん、それなら。」

そういつて、京介は俺と自分の位置を逆転させた。

そのタイミングを見計らって逃げようとしたが、がっしりと抱きしめられていて逃げ出すことができなかった。

「これなら、いいんだろ？」

確かに、これなら京介の重さを直に受けることはないけど……。

むしろ恥ずかしさは倍増した感じだ。

耳元に京介の吐息がかかる。

「……や、もう京介放して。」

俺は、顔を真っ赤にしてそう訴えた。

「ん？どうかしたか？」

でも、京介はむしろそんな俺を楽しんでるみたいにそういった。

（く、くそ、こうなったら。）

俺は意を決して、京介にキスを仕掛けた。

京介はそれに動じることなくキスを受けた。

（あ、あれ？もつと動じるかと思ったんだけど。）

むしろ、さっきよりなんだか、京介が激しくなってる気が……。

顔もなんだか紅潮してる気がする。

もしかして、

「京介、今、欲情してる？」

俺がそう聞いた直後、京介は盛大にため息をついた。

「普通、そういうこと聞くか？」

そういうと、京介は俺から離れた。

「まあ、今の一言が無かったら、このまま襲ってたけどな。」

「な。」

京介は冗談か本気かわからない口調でそういった。

「まあ、お前のそういう初心なところも好きだな。」

そう言っで、京介は俺の額にキスをした。

「だから、何があっても他の奴を受け入れるんじゃないぞ。」

「あ、当たり前だろ。そんなに信用できないのかよ。」

「信用できないんじゃない、心配だから言ってるんだ。」

京介は俺の髪をなでた。

（ああ、そっか、誰だっで心配になるもんなんだ。たとえ、それが自信家な京介でも。）

「大丈夫、京介が思ってる以上に俺は京介が大好きだよ。」

思いっきりにこっとして、そう言ったら。

「お前って、本当に……。」

京介は何かを堪えたような素振りをした後に、

「俺の方も、お前が思ってるより遥かにお前のことが好きなんだよ。」

「

そう言っで、俺にキスをした。

その時の二人には、現在平日の朝で、学校始業の10分前だったということはいっさく頭になかった。

a c t ・ 2 8 寮祭への参加（前書き）

一身上の都合により、長期休載していた旨、誠に申し訳ありませんでした。

また、執筆を開始いたしますので、どうぞ応援よろしくお願いします。

結局、朝のことが原因で盛大に遅刻してしまった倅は、担任からこっ酷く叱られた。

倅の心中には途中、

（この学校の理事のくせして、京介のヤツ…。）

と何度浮かんできたことか。

しかし、京介の評判が悪くなることは倅にとっても好ましいことではないので、結局の所、素直に叱られ続ける倅であった。

そんなこんなで、あさのホームルームが終わったところには、いつもの元気な倅がそこにいることはなかった。

「おいおい、せっかく最高に楽な終業式の日が遅刻するなんてどうかしてるぜ。」

「うるさいな〜シユン、もうこれ以上小言は頭に入らないっての。」

「あゝ、こりゃ完全にいかれてやがんな〜。」

とか言いつつ、シユンはにやにやしていた。

要するに、誰かが怒られてんのもコイツから見れば、一種のお祭り騒ぎみたいなもんなんだろう。

まあ、確かに、一応名門進学校と言われているせいかな、この学校の生徒たちは基本的に素行はきちんとしている。

もちろん、遅刻者もいるにはいるのだが、その比率はかなり低いもので、下手に遅刻をすると、学校の外には一人だけ、なんて状況もさらに起きてしまうのだ。

そんな中、教室の戸を勢いよく開け、倅の所まで鴻がやってきた。

「倅、遅刻って一体どうしたんだよ。だって家はあの……。」

そこで、倅は鴻の口を塞いだ。

（バカ、鴻。一応あんまりみんなには知られたくないんだよ。）

そう小声で鴻に伝えると、鴻は頭に？マークを浮かべていたが、とりあえず、静かになった。

そこに、いきなりシュンが割り込んできた。

「ちょうどよかった、二人とも聞いてくれよ。」

その瞬間、鴻はシュンに警戒の姿勢をとった。

いまだに鴻はシュンに対してはこんな感じなのだ。

「まあまあ、そんなに強張んなって。話つてのはさ、今度、寮で夏休み突入の寮祭やるんだけど、良かったら、二人も来ないかってことなんだよ。」

「え？それって、寮生じゃなくても行けんのか？」

さっきまでの警戒はあっさり解いて鴻が興味津々に聞き始めた。

「ああ……、まあ、その、大丈夫なんだ。」

なんだかしどろもどろに話すシユンに少し倖は不信感を抱いたが、
鴻の方はすでに乗り気になっていた。

「そうなのか？それじゃあ、せっかくだし行こ……。」

「ダメだよ。」

と、突然扉を開いて秀が言い放った。

「な、お前はストーカーかよ。」

「うん、鴻だけのね？」

気のせいかな、語尾にハートがついたような気がしたのはどうやら倖
だけではなかったようだ。

「気色悪い。とゆーか、なんでダメなんだよ？」

「ダメなものはダメ。」

いつもなら、ここからさらに食って掛かる鴻だが、今日はいつもと
違った。

「なあ、頼むよ秀。お願いだからさ。」

鴻はどうやら無意識のようだが、上目使いに秀にお願いをしたのだ。さすがの秀もこの鴻の行動にはびっくり（とゆつか、うつとり）していた。

「それじゃあね……。」

秀はシュンの方を見て、

「俺も行ってもいいかな？」

その目には有無を言わさないオーラが立ち上っていた。

シュンもそのオーラに気圧されて渋々と、

「あ、ああ、大丈夫。」

と言った。

そこで、シュンはこっちに向き直って、

「それじゃあ、倅ももちろん来るよな？」

と言われた。

さっきのシュンの態度は怪しかったけど、せっかく楽しめるチャンス逃す手はない。

「うん、俺も行くよ。」

そう言った後、シュンが密かにガッツポーズをしていたのを見たのは秀のみだった。

久し振りの執筆に加えて、文体が少し変わってしまったかもしれない。

この文体は変だ、という点がありましたら、ご一報ください。

そして、改めて長期の休載大変申し訳ありませんでした。

そして、寮祭当日。

京介には、寮祭のことは告げずに寮に来た（どうせ言ったら、反対されると思ったから）。

寮に着くと、玄関前でシュンが待っていた。

「遅ーぞ倅。」

「悪い、悪い。」

もちろん遅れた理由は京介を撒くためだ。

「まったく、今日の主…。」

そこまで言うと、突然シュンは口を噤んだ。

「ん、どうかしたか？」

「いや、なんでもねー。」

なんとなく怪しい雰囲気を出してはいたが、倅自身、寮祭という浮かれた行事に気を取られたのか、あまり気にはいなかった。

「それより、もうみんな準備できてんだぜ、早く行こうぜ。」

そうして、寮に入ると、すぐに祭り気分は始まった。

寮にいるメンバーが基本的に体育会系のメンバーなのでかなり盛り上がった感じになっていた。

倅は先に着いていた秀と鴻とともに席に腰を下ろしていた。

「結構盛り上がってんな。」

「まあ、一応これから長い休みに入る前だしね。」

この寮祭の主催者のようなメンバーが、各種のミニゲームを開いているの所から少し離れた場所で倅たちは談笑し合っていた。

当初は倅も鴻もそのゲームへの参加をしようとしていたのだが、如何せん、参加しているメンバーのその勢いには近寄りがたいものがあったため、このように食べ物などを食べながらの談笑会になっていたのだった。

そのうち、

「悪い、ちょっとトイレ行ってくる。」

そういつて、鴻が席を立った。

「一緒に行くよ。」

そういつて、秀もついて行った。

一人残された倅はぼーっとゲーム開催上の方を見ていると、唐突に

主催者と目があつた。

そうして、彼は突然こう言い放つた。

「さあ、それでは本日のメインイベント、腕相撲大会。優勝賞品はなんと、一年のアイドル、近江倅君でゝす。」

「は？」

会場はすさまじい歓声に包まれたが、倅は一人？マークを頭の上に浮かべていた。

そんな中、倅はさつさと賞品席の方連れて行かれてしまった。

「ちょっと、シュン、どういことだよ。」

そう言い放つたが、シュンはにこやかな顔で、体の正面で合掌をしていた。

（あ、あの野郎、こういことだったのかよ。）

しかし、すでに会場内では対戦が始まっており、そこかしこで、勝った、負けただのの声飛び交っていた。

残念ながら、頼みの秀も鴻もまだ帰ってこない。

そうこうしているうちに、大きな笛の音が鳴った。

「そこまでー。優勝者は高橋健二ー。」

優勝者と呼ばれた、かなりの筋肉質の男がウオーッと雄叫びをあげていた。

（ちよ、これってどうなっちゃうんだよー。）

と、突然玄関の方から大きな声で、「待った。」という声が響いた。会場にいた全員がそちらの方を注視したところ、そこには一人の長身のサングラスをかけた人がいた。

「その勝負、俺も参加させてもらっつ。」

そついつて、その男は対戦場まで素早い動きで来た。

突然の乱入者に会場にいた全員はさらに沸き立って、主催者も参加を許可した。

対戦はまさに一瞬のことだった。

高橋と呼ばれた男は一瞬で敗れ、その男は倅の近くまでやってきた。

そして、突然倅を肩から横担ぎにすると、

「それじゃあ、賞品はもらっていく。」

そついつて、大歓声の中、会場を後にした。

a c t ・ 2 9 会場での歓声（後書き）

とても中途半端な回になってしまい、本当に申し訳ありません。

また、この話も、そろそろ終わりに近づいてきましたが、どうか最後までよろしくお願いします。

a c t ・ 3 0 無事救出

寮の扉がボタンと閉まった後。

「あの、どなたか知りませんが……。」

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「へ？」

その直後、男はサングラスを外した。

「つて、京介！」

「お前、本当に気づいてなかったんだな……。」

（だって、あんまりにもらしくない格好してたから、わかんなかったよ。）

とは言えず、結局、あはは、と笑うしかなかった。

「それより、なんで京介がここに？」

「なんで、じゃねーだろ。」

京介は倅を肩から下ろし、そう怒鳴った。

「お前、一步間違えてみる、本当に危なかったんだからな。」

倅は、何も言わずに俯いてしまった。

京介は、少しした後。

「怒鳴っちまって悪かったな。」

「ううん。大丈夫。」

それから、しばらく沈黙が流れた。

「正直、お前が誰かに取られるんじゃないかって本当に怖かった。」

「え？」

そこには、いつもの勝気な京介ではなく、心細そうな表情を浮かべて立っていた。

「ここに着くまで、本当に気が気じゃなかった。一刻も早く着くことしか考えられなかった。」

そして、そこまで言うてから、一息すって、

「そんだけ、お前のことが好きなんだよ。」

そう、一気に言った。

倅は一瞬驚いていたが、すぐに、

「俺も京介のこと好きだよ。助けに来てくれたのが京介だってわか

ったとき、本当にうれしかった。来てくれてありがとう。」

そう言った後、京介は意地悪い顔に戻って、

「でも、結局変装してる俺のことは、分からなかったよね？」

「あ、それは、その……………」

そこから先を言う前に、倅は京介に抱きしめられていた。

「このお詫びはどうしてくれるんだろうな？」

「う……………」

そうして、少し背伸びをして倅の方から京介にキスをしたのだった。

a c t . 3 0 無事救出（後書き）

実は、次回で最終回です。

エピソード（前書き）

最終話です。

今まで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

エピソード

「そういえばさ、なんで京介があ場所に来れたか結局聞けてないんだけど。」

家に戻った後、倅は最も気になっていたことを京介に聞いていた。

「ああ、あれか？」

そうして、京介は爽やかに微笑みながら、

「愛の力だ。」

倅は思わず、その場でガクツとなっていた。

（今時こんなこと言う人いるんだな。）

そうしてから気を取り直して、

「そうじゃなくってさ、本当はどうやって分かったんだよ。」

そう倅が言ったら、京介は素早く倅を背中から抱きすくめて、

「なんだ？愛の力じゃだめなのか？」

なんて、倅の耳元で囁いた。

「ちょ、こっちは真剣に聞いてるんだから、ちゃんと答えろよ。」

そう言うと、京介は盛大にため息をつきながら、

「まったく、そんなに気になるのか？」

言っと、倅はいかにも興味津々といった感じでうなずいた。

そうして京介は倅と向い合せになって、倅に触れるだけのキスをした。

「な、京介！」

そういった直後、京介は真剣な眼差しになって、

「倅……………」

と言った。

「なんだよ？」

「内緒だ。」

そう一言だけ言った。

エピローグ（後書き）

最終話まで読んでくださって本当にありがとうございました。

執筆途中、まあいろいろありました。

長期休載にスランプ、文章がうまくまとまらず、読者様には本当にご迷惑のかけっぱなしでしたこと、心からお詫び申し上げます。

実は執筆中、こんな終わり方でいいのかな、なんて思ってしまったんですが、まあこういうのも有かなって感じで終わらせてしまいました。

とりあえず、この作品はこれにて終了となりますが、まだまだ執筆は続けていこうと思っておりますので、今後ともよろしく願います。

最後になりましたが、この小説を読んでくださった方々すべての方に、この場を借りて御礼申し上げます。

重ね重ねになりますが、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5259m/>

パパとの関係

2011年10月6日22時51分発行